

トド氏は論じて曰く、唯精力の種々の形状が、性質的に明白なるのみならず、吾人は更に凡此等の形状の断定せられたることを知るの手段を有せず、——然れども此の精力の未知の形状の可有性は、既知の形状が悉く機械的に非すと云ふ蓋然性と合體して、許多の新なる光景を暗示せることは明なりとす。

實際の疑問は可有性の疑問に非ずして事實の疑問なり。吾人は既に事實の中に「進化の未知の原動力」あるを信せしむる所の諸の理由を、事實の中に發見せり。吾人は更に進んで生命の現象が、吾人をして行動すと假定せしむる此未知の原動力は、生ける物質の理學的又化學的性質の中に、其の性質の、吾人が之を發見せんとするに當つて唯知られずして存せるも、吾人の心智的生命の光に照して之を見るや否其（原動力）は此等の諸性質の中に恒存的、勢力的の物として、己を顯現せることを斷言せん。別言すれば吾人が由つて以て生くる所の睿智に關する知識は、連續せる下等の秩序を通じて、直に細胞内の組織に解釋の光を投ず。高等事物の光に由りて、下等事物を讀み得る時、其の知識は眞の知識なり。心智的完成は其の動物的發端を解釋す。

然く進化學の新光に照して自然を解釋すべき努力の中に、想像上の困難屢吾人の面前に反覆せらる、曰く、此等の事物如何にして之あるを得る乎。此は世界の精神的概念に關する古來の難義にして、當時の智慧の大家が星夜其の大教師と共に屋上を歩せしとき、其の大教師に向ひて發問したる所なり、曰く、此事如何にして之あるを得る乎と。

此の論點に於て、吾人の面前に直接に横はる所の概念的難義は、自然の睿智と機構との共同關係及び共同行動に屬す。兩者は正に兩立す。事實は機構を證明す、事實は更に睿智的行動の如く見ゆる所の或物を

指示す、即ちオスカル・ヘルツァグが言へる如く、思想の過程に類せる所の自然過程其物是なり(細胞及其組織二百五十八頁)。吾人は進んで自然の機構を開示する所の同一事實同一證據が、又其の機構の睿智的作用を指示することを言はんとす。

生命は單に過程たるのみならず、又進歩なりとす。進化は唯發達するのみならず、進歩的發達なりとす。其の向上は生命價値の標準に由り測度せらる。此の生命價値の標準を進化に適用することは、誤なく自然を讀解することなり。然かするは進化が進歩なき過程なりと主張する人々に對する十分の答辯なり。然りとはいへども睿智的自然過程は如何にして理會すべき乎。

此の想像に必要な保助として、或る假定説茲に暗示せらる。此の假定説は能く吾人を助けて如上の睿智的指導力が如何して自然の行程を一貫して生動し得るやを合理的に理會せしむ。吾人は此の目的の爲に次の巧妙なる一假定説に言及せん。此は熱の法則に對する解釋の困難が、大理學家クラーク・マクスエルをして提出せしめし物、マクスエルの「按排する鬼神の假定説」として有名なる物なり。彼想像すらく茲に一個の器あり、一個の割壁しゝを以て兩部分に區分せらる。其の割壁に一の微孔ありて、物質の微分子が之を通じて器の一部分より他部分に竄入し得と、是に至つて彼は此の器を主宰する睿智を想像す、其睿智は其の割壁に飛流し來る所の分子を看別け、巧に其の微孔を開閉して一切分子の同種を一部分に篩ひ入るゝを得る者とす。此の按排する鬼神の操縦に由つて、各自速力を異にする分子が二個の部分に分たれ、而して何等分子的精力の消滅又失亡あることなし。是に於て物質は精力保存の法則を破ること無くして、睿智的に按排せられ決定せらる。

微孔に竄入する所の分子の方向は歪めらるゝことなく、又一切分子は手もて觸れらるゝことなし。尙且此等は淘汰せらるゝ(マクスエル)熱の說三百五十九頁。

此の巧妙なる概念は好く其の目的に恰當せり、然れども此の分子の按排の際に何等の精力の損耗すること無しと云ふは、稍や言ひ過るの嫌あり。按排する鬼神は、其の手分子に觸れざるも、好く其の運動に由りて其の事業を遂行す。彼の事業は、若彼を其の器の内に住む者として想像するとき、睿智なる観察家の目にも見えざるべし。彼観察家は唯元子の規則的なる注入のみを認めて其の小箱の外に立てる按排する[睿智]に就ては、永久不可智論者として存すべし。然れども彼は若健全なる心を有したらんには、其の器の内なる微孔より注入する分子の規則的なる事實よりして、此等分子は彼が之を認識せる前に、或る當事

者の篩ふ所となりし物なることを推測するを得べし。箱の内なる睿智は曰ふべし、吾が知る所の一部分に止ることは眞に然り、然れども吾が知る所は我之を知る、吾が知る所の一事は即ち、分子が吾が世界に正規的に來る所以は、或る當事者即ち精力が此等分子の間に働くこと云ふ是なりと。

吾人は然かしてマクスエルと共に想像す、方向は縱令其の科學的方面よりして、分量として測量し得ずとするも、之を物質に賦與されたる物として理會するを得と。吾人の生命に於て、睿智と肉體機關の細胞の間に主動と反動と存せることは確實なり。自然は其の世々の過程を一貫して、甚だ巧妙に篩はれたるやう見ゆる事は、炳然たる事實なりとす(ワード)拔萃論文二百一頁以下。

睿智が、行動の見るべき損耗なくして、指導的原則として働き得る其の

方法に關して科學的想像を助くべき保助は他に一あり、即ち刺戟に應ずる有機體刺戟の行動に關する生理學者エルヂーンの暗示を、同様の方法を以て運用することなり。彼曰く、相違せる刺戟が肉體の相違せる部分に存すると云ふことは、刺戟の現象の興るために必要なりとす。刺戟若し凡の方面に平等に働かば、前章に記したる刺戟の一切結果が即ち起る。然れども此の場合には指導力は必ずや不在なり。唯不均齊なる刺戟のみが、運動の方向を主宰し得、普通生理學四百二十九頁。今之を考へんか、不均齊なる刺戟が運動の方向を主宰し得ると云へり。然らば若マクスエルの按排する鬼神が、單に相違せる刺戟の位置を變へ、或刺戟を按排し、其の他を結合せんと努力する物とせば、此の鬼神こそ該生理學者に據れば、生命の發達の上に指導力を行ふべけれ。若彼發見せらるゝこと無くして、世界の行程に於て刺戟を淘汰し、利用し得

るものとせば、彼は生命を嚮導するに、見えざる攝理として行動するなるべし。外部の「威能」は吾人に觀察さるゝ無くして働くべきものとして、少くとも働き居るものとして、容易に然か譯註見えざる攝理として、理會せられ得。若知らるゝとせば、其の結果に由りて知るべきものとす。進化の未知の原動力は、即ち次第に、進歩的に、漸々徐々に、自然と歴史とに於ける原動力其物の刺戟の性質に由りて、明白に默示せらるべし。

第六章 自然界の方向の道德性

進化が睿知を指示せることを假定すれば、こゝに忽ち他の疑問興る。曰く、其方向は道德的なる乎。睿知の性質よりして其の道德的ならざるべからずと假定起る。蓋は理性と正義は兩者相關する吾人の内面的經驗に據れば、其の嚴密に相ひ關係せることを見ればなり。一分理性の存する處に吾人は人的經驗よりして亦或る程度の道德の存在を假定するを得、少くとも理性は善惡の間の或る區別を鑒察するに至るべき自然的道德力を有す。然れども理性的に理解すべき宇宙が、亦或る徳義性を有せざるべからずと云ふ此の一般的假定の外、實際に觀察し得る此の方向の諸事實は、亦自然界に於ける何等か道德的嚮導の特徴を示さざる物にや。是は世界に於ける道德的攝理に關する古き

疑問——約百記よりも古き疑問なり。吾人は十九世紀の科學より、一切人間の問題の上に降射し來る所の新なる光によりて之を再閲せざるべからず。

若進化に於いて仁愛的性質あらば、其は生命的價値の着實的増加に由りて其自己を顯はすべし。吾人は生命の増加的價値の中に其の特徴を穿鑿せざるべからず。生命的價値の増す所には、仁愛的性質を有す、然れども生命の價値の中に何等此の如き所得が、進化によりて確取せられたる乎。吾人の此の問題——古して而も恒に新なる自然界の仁愛の疑問——が是故に此の方法に率ひて科學的に其自己を提出す、曰く生命的價値——生命に對する能力と幸福の増進——の吟味に由りて判斷せば、進化は何等かの正善なる道徳性を明示せるや否や。今や衆目の前に開展されたる一個の廣汎なる事實は即ち、生命は其の

發達の世々の過程に於て、高等の動作を行ひ、豊富なる幸福を得べき能力を得たることなり、自然は最初に在つては唯活きて動くに止まる、遊ぶことなく歌ふことなし。然も自然は遠からずして遊ぶことを爲し、歌ふべき口を開けり。

感覺性の此程度まで進み來りし生命の向上と、此の向上の道徳的意義とに注目せよ、吾人は滴蟲類の有機的應答を目撃するときに、感覺性の最小額に接近せり。刺戟に對する小動物の單純なる反射的運動は、正に零點以上なる感覺性の程度を示す。蓋は吾人は精神的生命の零點即ち其以下には化學的反動あり、其以上には有機的感應の起る所の、其の零點を語ることを得ればなり。精神的生命の諸程度、諸種類の一切向上的連續は此の點よりして發達し來れり。今若生命が其の稍睿智的なる顯現に到達して、突然此の精神的零點の上に停止せば、若自由に

游泳する所の滴蟲類の單純なる反射的運動を以て、此の關係(譯註、生命的價值)に於ける最高所得と爲さば、幸福に於ける一切生命的價值に關して吾人の見得る限りは、生命は此の切斷點に於ては何等の證據をも呈示せずと謂ふべし。一滴の水に浮ぶ極微なる生命も、自由運動、有機的應答及び自個維持に於ける或る努力を證明す。然れども何等の觀察家も、未だ嘗て之れを以て快樂なる存在として算する者なし。然れども此の極微ながら稍自由なる世界(譯註、小動物界)は將來の快樂の可存性を證し、其の來るべき預言的暗示を與ふ。蓋は一たび得たる感覺性を増進せしめ、之をして十分に發達せしめば、時に及んで動物の快樂的生存が其結果として來るべければなり。感覺發達の悠長なる過程を追究せよ、汝は快樂的生存の此の最初の微光が、闇黒中の光として發達し來るを見るべし。遼遠なる生命は其の一倍自由なる外面的遊戯

を行ひ、又一倍精巧なる内面的調和を行ふべき能力を、既に獲得し初め、幸福なる空氣に向ひて其の觸手を伸べ、太陽の光に向ひて感覺し初めぬ。其の初代の複細胞動物に在つては、快感的能力を得ることは甚だ輕微なるやう見ゆべし。相互役事に束縛せられたる細胞の植民は、唯生存の爲に此の如き劣等なる方法を以て共働するもの、正善と甘美の如き何等生命的感覺を有せざる所の勞作的植民たるに過ぎざるやう見ゆ。然れども、此の處にさへも動物的快樂の王國は近づき、將に來らんとしつゝありき。原素的生命は遲鈍にして寂黙なり。然れども若其の自個維持の努力及び向上にして一朝廢止し、生命が其の發端の微閃の後無機體に還滅せば、其の完成し初めたりし事物は消滅すべし。若此の初代の複細胞動物生命が、其の出で來りし所よりして全然再び闇黒に還滅せば、少くとも可存的或物の正善なる發端と價值ある所得

とは徒に失はるべし。此の單純なる關係に於て按排せられたる此等細胞、即ち複細胞動物は猶未だ幸福を綴らず、然れども此等は快樂なる存在に生長すべき事物の發端されたりと云ふ暗示を包含す。營養十分なる蟲類、牡蠣の無覺的満足は謂ふに足らじ、然れども是れ實に新なる生命的事實にして、或事を意味する物なり。進化の續くに隨ひて成長する感覺力は注意すべし、是は時に及んで統御的原動力となる、而して又善なる事物の之に由つて正に己を默示せんとて來りつゝありと云ふ較著なる特徴となる。生命てふ秘密は自ら之を開示するが如く、善の一たるを自證せり、遠く一邊に立てりと自ら思ふ觀察家は、生命の正に自個を知覺するに至るに當り、其の生命の中に、彼をして感せしむるに足るほどの道德性の特徴を看破するを得ざるべし。然れども又彼は己をして未信者たることを免れしむる爲に、——善なる事物の默

示せらるゝを待ちて、驚異すべきまで十分之を觀察するを得。

想像を以て發達の過程を何處迄も追究して、地上の生命が感覺を得て煥發し、吾人が今正に見る如き、始終變化する所の形體を以て、動物界の調和せる順應と、十分なる慾望に適する人類に及べ、生命の價値を其絶頂に於て量れ、即ち之を、獲べき高貴なる物、之れを生くべき高價なる物として、其の人的自覺を以て、遂に天上の歡樂と満足に向つて突進したる物として之を測量せよ。生命的價値の特徴を以て認識したる道程に沿ひて、無量の距離は通過せられ畢れり。快樂的能力に於ける巨額の所得は、此くして得られたり。人類に可存なる幸福は、單蟲に可存なる幸福に較ぶれば、殆ど天と地との差あり。然れども此の巨大なる距離を通過して、此の最高の能力を獲得することは、是れ即ち自然界の默示を組織す。進化の道德性は之に由りて説明せられたり。達し得た

る目的は善なる目的なり。是故に幸福なる生活に達すべき感覺的能力を得んが爲に世々堆積せる貢獻に由りて判断すれば、天然は十分に働きたり。天然は然く大體より見るときは道徳性を受け取れり。秩序は全體に於て價值ある秩序なり。

是に至るまで吾人の議論は全然生命の道に於ける光明なる方面を論せりき。然れども自然界を通して闇黒なる方面が光明なる方面と平行せざる乎、快樂に對する感覺の増進と能力の生長とに對して吾人は苦痛の増長と惡の愈大なる能力とを指摘せざりし乎。詩人が左の如く歌ふに當りて、彼は嚴格に科學的に歌ふに非ざる乎。

微妙なる快樂を響く所の琴線も、
深甚なる禍害の調を弾く。

快樂に對して増進する所の能力と共に、苦痛に對して増進する所の苦

痛が伴ひ來たる事は拒むを得じ。吾人は最も能く友誼の爲に苦しむ、愛は其の中に一切十字架の悲哀を藏す、死恆に生命を覆ふ。其の陰は最も輝ける生命を覆ふこと最も深し、最も善く生活し得る人は死することを最も難しと發見す。

世界の道徳的意匠に關する此の如き疑問に對しては、或る善なる意匠が、増進する所の感覺に由りて默示せられて見ゆるが如く、二個の答案が、觀察されたる事實に由りて直接に提出せらる。

快樂と苦痛は事實として平等なる比例を以て増加せざるなり。反りて苦感に多れる快感の總額が、全體として生命の勝利を説明す。生ける能力の増加は死す苦痛の其よりも速かなり。生命の發達に於ける初代の舞臺と後代の舞臺とを比較するに、勝利は必ず幸福なる感覺の方面に存す。生命の樹は其の枝頭に至美の花を發し、囀る鳥は其の

高梢の間に巢ひ、生命の更に廣き遠景は、生命の向上するに随ひて開く。精密なる科學的研究を以て物質を見れば、自然の選精進化の増加は、快感の剩餘を誘入することを吾人は認知す。無機界は幸福界に非ず、高等に進化したる生命は、單純なる細胞の植民が受くるよりも、一倍多き生命の快感を感受す。各個特異なる感官の發達に由りて感せしめらるゝ所の快樂は、有らふる苦感の伴隨額よりも遙に超絶す。吾人の中誰か往々人の聞て忽ち忘るべき所の不調音の爲に、善好なる耳を音樂に假すものあらんや。其自身日光に由りて光明となりたる所の、吾人の見る所の眼は、數等優りて地上を見、其の中に苦痛を認識するより多く、其中に快樂を看取す。各個感官の能力の斬新なる増進は、一倍精妙に調和し一倍美麗なる光景を有せる世界を開示す。完備したる眼が由つて以て生命を見る所の光は、一切の景影よりも巨大なり。縦令死

は主宰すといへども、高等なる動物界は、其の生ける間は無上の幸福界なりとす。

フレイス氏が「生存競争の道徳的光景」に於ける彼の註釋に吾人の注意を喚起する所の事實は、此點に於ける目的の爲に甚だ有効なりとす。彼は此等動物に於ける假定的不幸は、實際殆ど存すること無く。唯同様なる境遇に於ける修養ある男子や婦人の想像感覺到過ぎざること、生存競争に由來したる實際苦痛の量は、動物の中には殆ど無意義なることを想像せり。此の說の證據として、彼は「動物は全く死の豫期の爲に苦しむ所の苦痛、大抵の場合に於ては實死よりも多大なる所の苦痛を省かれたる事實」を回想せり。彼又「動物が不斷其生命を享有すること更に進んで其享有の性質を考察すれば、規則として動物が其の享くるに足る所の一切の幸福を享くことを指示す」と云ふ事實に言及せ

り。彼は生存競争に關して次の結論を抽けり、其の(生存競争)の實際齎し來る所のものは、苦痛の最少額を伴ふ生命、及び生命享有の最多額はなりとす。死と生殖との必要を舍け、——是無くしては何等有機體の進歩的發達あること無し、——然らば幸福の比較的少量の事實を斷定し得る組織を想像することは困難なりとす。[ダービン主義]三十六頁以下)此等フレイヌ氏の諸説と關係して、吾人は他の博物學者を感動せしめたる所の諸説、即ち自然の恩惠的供給に従ふ所の動物生活の浪費と破壊の大部分は、個體的感覺の發起し又は發達する前、胚種、種子及び胚子の形狀の中に起る所の出生前の事物なり(譯註、故に死の觀念現生活にあること無し)と云ふ論説と、高等動物すらも明白に死の觀念を有せずと云ふ事實とを思ひ起す。死の知識及び死の苦痛の獲られたるは、唯人類に由るのみ。人類に由りては又其の恐怖に打ち克つべき

精神的威能をも併せ獲られたり。別言すれば惡と云ふ深き秘密の知識は唯之に駕して上る所の威能を賦せられたる此の活物にのみ與へられたり。雲の黒きを見得る吾人は、大凡惡の秘密は僅に無限の日光の中に、一時の存在を有すのみ、其の影は忽ち過ぎ去ると云ふことを信すべき威能を得たり。

同じ目的に關して吾人は又ダービン以後に於ける動物の遊戲の興味ある研究に言及するを得。動物並に小兒の遊戲する事實は、一般觀察家の熟知する所なり。有らふる兒猫は此の事實を證して餘あり。然れども此の遊戲が如何にして饑餓せる、苦闘せる、殘酷なる動物界に到來せしかば他の疑問に屬す。遊戲並に勞動の動物界に誘入せられたる道徳的意義は、一般に看過されたりと見ゆる所の事物なり。動物が何故遊ぶかの疑問に答ふる容易なる答辯は、曰く動物の精神に餘剩あ

るが故ならん。動物遊戯に關して、始て此の簡易なる説明を與へたる者は詩人シルレル其人なりき。ハドバート、スペンサーは萬理を理會せんと欲する所の其の概括的形式の中に、此の説明を編入したり。彼は此の答辯を補足するに、餘剩精力が動物遊戯の最初の状態なる同時に、遊戯の正確なる形狀を定むる物は模倣なりと云ふ暗示を以てせり。模倣は動物精神と結合せられて遊戯てふ幸福なる結果を呈出す。是れ吾人の生活の道徳的價値の特徴なりとす。然れども新ダーギン派は動物遊戯に關する此天然なる説明を以て満足せず、其一人なるグルース教授は動物遊戯に於て單純なる偶然的形狀以上なる或物、又は生命發達の幸福なる所屬物を見たり。彼吾人に理會せしむらく、是は一切自然淘汰の下に來ると。遊戯は「勞働の雛形」として其必要なる位置と職掌とを生存競争の中にすら有す。トムソン氏が之を説明したる

が如く、遊戯時期は修業なり、重要なる時期に於て過失無からん爲、大なる利益を具せる所の、成熟生活に對する準備なり。歴世の經驗を以てすれば、嬉戲を以て最も巧に獵る所の兒猫、又他の若き肉食者は、本業に於て最も巧に鼠を捕ふ。遊戯せざる者、又は遊戯に拙なき者は、駆逐され畢る。是故に遊戯は無責任の演習、實戰に先つ假戰、眞實の競走に先つ豫備的競走なり。約言すれば、グルースの言へるが如く、動物遊戯が其の幼兒なるに由ると云ふ斷言に眞理あるも、又其の遊戯せんが爲に少年時代存せり、其の遊戯の形狀は成熟生活の實際に隨ひて決せらるると云はんども、強ちに眞理ならずと謂ふべからず。

動物界の遊戯の起源に關する此の生物學的説明は、自然淘汰、不適者放逐の嚴法の慈愛的活動を説明す。是れ自然の嚴酷の由つて興る所の善の他の例なりとす。實やサムソンがペリシテ人に提出せし所の舊

き謎は、創造の道徳的隱語の一を、科學的に説明する物として用ひられたりと謂ふを得べし。蓋は自然の強力よりして其の甘美の出て來ること、嚴格に眞實なるが故なり。獅子の體に蜂と蜜と發見せられし如く、往々自然の猛烈なる威能、殘酷なる饑饉なるべく見ゆる物よりして、自然の生命の快樂なる生存と甘美の羽吹が時に及んで出て來りたればなり。吾人は花の美と鳥の歌謠の多數を自然淘汰の嚴酷なる慈悲に歸せるが如く、又高等動物の遊戲に對しては、有機界の奮闘の必要、饑餓、危險に負荷せるなり。遊戲は生存競争の一部分として、興り來れり。是故に其唯偶然、又は反動に由來せる物なるかの如く推諉さるべき事物に非ず。遊戲は其の實用あるが故に、自然界に先其の位置を得たり。生存競争の一部分又幸福なる結果として、其の價値は生命の向上するに隨ひて増進し、其の時期は高等なる家畜に於て延長せらる。吾人に

在ては遊戲すべき威能は全生涯の饑餓せる歲月の間、内面的に運用することを得る物、而して終に更に老境の宗教的幻夢に於て、來生に對する靈魂の自由の準備、又待望の部分たるべき精神的恩賜となる。實に自然界の遊戲の起原と使用とは、吾人の精神的な生活及び自由を與ふる自然の幸福なる恩賜としての遊戲の高等なる意味と價値とに關して立論すべき、良好なる本文を供給す。高等動物に於けるが如く、猶其にも増りて男子及び女子に於いては、最も成効すべき者は最も生存すべき者なること眞實ならん。自然が此く長く準備したりし所の恩賜、即ち好く遊ぶべき能力の如き恩賜は、吾人の習慣に隨ひて輕蔑せられ、商賣主義を以て着色せられ、賭博の習慣に於ける如く俗了せらるべきものに非ず。遊ばざる動物は偶發的興味より假り來りて已の嬉戲的運動に加味する所あり。唯人のみ遊戲を俗了す。之以外なる自然的事

物の如く、遊戯も亦理想化せられざるべからず。人類の至善至高なる靈的生活に於て、位置と使用とを有すべき物なり。汝は眞理の市なる新しきエルサレムを記述するに當りて、左の美妙なる文句を加へし者は嚴格なる古の預言者なりしことを記し、曰く「又其の市の街衢には男の兒女の兒満ちて街衢に遊び戯むれん」(撒八〇五)

吾人の遊戯の眞用、又理想化に關する此の如き實際論を繼續するは、吾人をして稍吾人の直接問題より岐路に入らしむるを免れず。吾人は今本問題に返りて自然の廣大なる過程が、幸福なる性質を有する他の特徴として、此遊戯が遂に動物生活に入り來りしことを主張す。幸福なる性質は(生命的價值の程度に於て測る所の)善なる目的又は意匠の特徴、即ち自然界に於ける道徳性の特徴なりとす。

博物學者が下等有機界に注視するとき、彼等は往々其の沉默界の明白なる寂寥と喜樂とに感ぜざること能はず。茲には唯不斷の運動と饑餓あるのみ、滴蟲類及び下等の有機界には、唯無終の移轉と不斷の形體の生殖と、微少なる感覺とあるのみ。何等の音響も何等の歡喜に對する飛躍も、伴侶も、音樂も、遊戯も之れあること無し。然れども此の荒涼なる沉默なる世界に遊戯の來りし時に、——共働する、娛樂なる、輝く、燦めく遊戯——是は正に生命の新なる曙光に均しき物なり。茲に闇黒に於ける、發達すべき他の光明あり茲に神性に對する生命の最初の暗示あり。遊戯は動物界に於ける慈愛の神の最初の證據の一なり。蓋は饑餓に初まつて遊戯を興す所の生命は、是故に幸福に向つて長足の進歩を爲したるものなればなり。此の生命の道の終局は満足なるべし、上なる光に隠れたる、其の絶頂は祝福なるべし。

是故に遊戯は重ねて之を力言すれば、其の饑餓と死の世界に來りしと

きに、生命の最初の約束の一として來り、生命の一切の精神と嬉戯と喜樂とを併せて、進化の明白なる所得、道德的所得として來りしなり。若人眞實に世界的過程の性質を眞實に判断せんと欲せば、看過すべからざる者は此の一特徴なりとす。

又生命の闇黒面が屢吾人をして感ぜざるを得ざらしむる所の此の疑問に對する第二の答辯として吾人は既に有限の法則として記載したる彼の方向の性質を恒に心に浮べざるべからず。大凡理會し得べき世界に於て、指導的「睿智」は有限の下に作^{はた}き得るのみ。創造は其自己に於て有限なるなり。言語に發せられたる思想、大理石に彫られたる觀念、書籍に著はされたる議論、詩篇に組み立てられたる想像——是は唯自由の精神に由りてせる創造なるのみならず、又亦其の有限たるに外ならざるなり。一切の顯現は自個有限にして、又自個默示なりとす。

此事は無限なる心にも有限なる心にも眞理たるなり。物質に由りて對象せられ太陽、星辰、生ける細胞に由りて發表せられたる神の觀念は、自然界の一個調和的秩序に由りて、一體として結着せられて、創造的有限なる同一自律的法則の下に束縛せられたり。神の言は呼び返さるゝこと能はず。神は永久其爲す所を爲したまふ。吾人若彫刻家の思想が、其の上に彫まるゝ所の大理石を、高貴なる使用に導き、詩人の天才が、言語を用ひて巧妙なる諧調を作り、神の觀念が萬物をして善に向ひて共動せしむるものなることを知らば即ち足れり。此等人間の創造例せば繪畫、若くは書籍に對しては、吾人は言ひ得、是は出來得る限り善く出來たる物なり、彩色も屬辭も此の右に出る能はずと。然し自然に就ては吾人の有限なる知識は此の如く立ち入りて斷言することを許さず、即ち或る神學者の爲したる如く、是は可能的最善の世界なりと言

ふことを許さざるなり。然れども又同時に然りと云ふことを拒むことをも許さざるなり。正言すれば吾人は實際知らざるなり。吾人は哲學的には其の然らざるべからざることを推論し得るのみ、然れども科學的には其の善なる世界なること、大體に於て生命は善なる目的の爲に作動せること、自然の向上は幸福なる感覺てふ明白なる道徳的所得なることを思惟すべき道理を發見し得れば足れり。生命は自然の制限の下に吾人が其の物質と其の法則とを知るが如く、生命的價值と快樂の能力とに進歩せりき。是は生命の顯著なる又主要なる性質なり。吾人は或る一倍從順なる假想的物質より成立したる倍善の世界あるべしてふ假想の爲に、此の道徳的性質の默示を正當に拒絶すること能はざるなり。蓋し吾人の此の世界よりも倍善なる世界は有るべし、蓋は吾人は其有無に就て知る所無ければなり。又此の世界及び現

現世の生命は他界の存在の爲に行すべき、吾人の未だ知らざる或る有用なる順應準備あらんこと、猶自然の下等階級が高等階級の爲に役事し、其の將來の爲に準備するが如くなるものあらん歟。然れども吾人は將に顯はされんと時期を俟ちつゝある惡の秘密の中に於いて、實際世界の組織と行程に、善なる意象の指示あるを觀察すると、又吾人の測量し得る其の有限内に於て、自然は既に單に生命を喚び出すに於てのみに非ず、大體に於て倍善倍大の幸福に適する善なる目的と發達との爲に活くるやう、生命を導き訓練するに於て成效したるや否やを判断することとを以て、正當に満足するを得。吾人は既成の宇宙に對しては吾人の之を知る限りに於て、彼のアイザック、ワルトンが其の釣魚の安逸無罪なる蘇息に適用したる草莓に關する論説を適用するを得。曰く、神が倍良の莓を造り得しことは確實なり、唯神が嘗て之を造らざ

りしと亦確實なり」と。吾人は倍善の世界が造られ得べかりしことを知らず。然れども釣魚者が野川の岸に於て摘みたる草莓の如く、神の造りたる世界も亦善なり。生命の善味も亦吾人の嗜好に甘美にてあるなり。

人の生命に於て又、人間の歴史の斬新なる基督的精神的進化に由りて得べき、倍高なる生命価値の理想に向上する道徳的方向の特徴を追究するは、自然に基く吾人の直接推論の限界を超ゆ。然れども吾人は如上の慈愛的生命増加の法則が、人間の歴史に登れることを観察するには、可なり長く人間發達の線路を眺望せざるべからず。吾人は茲に創造の全範圍、全階級を通して上下左右に適當すべく見ゆる一原則を、堅く信じて掌握し得、即ち細胞内の方向と世界上の方向、又は最小に於ける

る撫理と最大に於ける攝理、是の兩者は相互に自他を確定し、自他を説明し、世界の道徳的秩序の由て以て建つ所の慈愛の動機を開示すと云ふこと、是なり。

吾人若し由りて以て自然界に於ける進化を測量したる所の同一尺度、即ち生命価値の増加の尺度を人間の歴史に應用せば、進歩の正確なる證據を提出するを得べし。吾人は生命の価値の此の如き進歩を、全體としての歴史の道徳的性質の顯著なる特徴と主張す。蓋し此の世界に於て、而も此の新世紀の發端に於て存立する所の、生活に對する人的能力、生命に於ける人的快樂は、一百年前存立せし其よりも、又一千九百年前垂死の羅馬帝國に於てせし其よりも、乃至アブラハムが倍善なる國を索めんとて、其の往く所を知らずして出たる古代に於ける其よりも、寔に大なり。此の比較校量を行ふに當りて、吾人は彼の厭世家を看

過せず、又は縦令之を看過すとも、然するに如かずとするも、此の生命は人類の大多數に爲には、如何に艱難にして苦痛なるかと云ふ明白なる事實を看過するを欲せざるなり。遮莫生命價値の尺度に由りて量りたる此の比較校量は、吾人の前に横はる自然過程の全體に於て眞なるが如く、人間の歴史に於ても眞なりとす。生活に對する人的能力、生活に於ける人的快樂の全體の進歩の上に、歴史の占領したる位置を論ずる爲に、此に停足する無くして、吾人は茲に單純なる二點の比較を施して進行すべし。其の一に就ては、吾人は現世紀の曙光に於て豊富に生活し、厚大に生命を享樂すべき富人の能力クリーサス(吾人をして想像せしめよ)の時代に於て可能的なりしよりも卓越せることを指示す。クリーサスは其の鉅富を擧げて何等の善功を爲し得し乎、當時までに進化し來れりし世界は、其の堆積せる富有を豊厚福益に使用すべき如

何なる機會をクリーサスに提供せし乎。否否、彼の時代に於て人は未だ其富有を善益の爲に用ふることを十分に知る所なし。一弗の金も當時に於ては慈善の目的の爲に使用する價値ある無し。之を使用せんと欲するも使用するを得ざりし故なり。自個享樂の爲にすら比較的クリーサスに小價値なりき。彼のクリーサスは唯其の富有を貯藏せしのみ。彼は大世界の上なる有らふる貧者の爲に、一年毎日、無數の哀願者の爲に訪はるゝが如きこと無かりき。然も彼は貧者たることを耐ふる能はざりしなり。父アブラハムの、其の時代に於ける亦然りき。其の羊群は蕃殖し、其の牛群は増加せり。然れども唯彼自身を顧慮するの外、其の慈善を行ふべき機會如何に罕なりしとするぞ——自個享樂の爲、又は蘇息、美術、音樂、其他、人自ら己を幸福ならしめ、人をして幸福ならしむる所の數千の方法に、合法的に其の財産を使用せん爲には、彼自身の

世界は如何に狹隘なりしとするぞ。約言すれば一切高貴なる使用に充つべき富の増加は、其事既に進歩の確實なる特徴なりとす。

他の同様なる比較校量を、人的生命の他の方面より、進歩の爲に行ふとを得、例せば下層の人民の爲には、生命は其の當に須らく有るべき程度、又其の猶有らしめられべき程度を去ると甚だ遠きことを許せ。尙且人は平均して恒に現在は過去よりも幸福に生活せるらし。是は單に比較賃銀の疑問にあらず、又比較所有の其にもあらず、少くとも此の世界の慰藉的應用が人類の大多數の爲に増加する傾向あることなり。然れども猶之に加へて吾人は殆ど有らふる人類の小兒——猶凡て有らふる小兒と言ふを得ざるを悲む、然れども多數の小兒の、此の後世に於て生るゝ世界は、其の中に在る生命が、過去の時代に於てよりも、最初の野蠻的植民に於てよりも、又は歴史的時代の内に在りてよりも、其の

眺望に於ては倍大に、其の同情に於ては倍富に、其の目的に於ては倍高に、少くとも人道に對する其の苦闘と希望とに於ては、一倍快樂なる世界たるなり。古代の一アツシリヤ人の卓に唯一字の外解すべからざる一斷句あり、——其の一語、舊世界をして吾人の此の新世界に接近せしむ——是は「惡」といへる文字なり。全代の人間此の語を知れり。或る悠遠なる、光輝ある將來の世紀に於て、——若今過ぎ去りし前世紀の埋藏されたる石碑が、吾が此の世界の書類として發かるゝことありとせんか、——其の惡てふ史的文字の、猶其の碑文の中に書かれたるが發見せらるべし。然れども、其の文字の上に或る他の文字が現世紀の最も顯著なる言語として、倍大の筆を以て書かれたるを見るべし。此の語は人道が一切の中最も大なる物として始めて知りたる所の語なり、——是れ即ち「愛」なり。

第七章 美の意義

茲に吾人の猶未だ着眼せざりし所の自然の方向の一光景あり、若吾人にして過つて之を見ざりしならば、吾人は世界に於ける理性の一個微妙なる特徴を遺漏すべきなり。是は自然界に於ける美の顯現と其の高尙なる意義是なり。

クレオパトラの鼻の一寸又は二寸前後が、世界の歴史を變轉したりと云ふは、深遠なる思想家バ斯卡ルの思想の一なりき。美の歴史的勢力の一たることは確實なり。然れども吾人は今は其の美が人の心内なる思想の中に施し得べき所の善と惡とに對する其の影響を量らんとは試みざるべし。吾人の現時の穿鑿は、自然に基づく吾人の推論の範圍に限らる。自然の美は如何なる威能より發し來り、如何なる目的の

爲に世界の進化に生れ來りしや、如何なる精力が之を喚び出せし乎、其の如何なる模様を形象せられしや、而して其の顯現は自然の方向の如何なる特徴なるべきやと云ふことは是なり。

ダーウィンの科學は諸の花卉、又諸の動物生活の美なる色彩、及び斑點的裝飾に關する容易なる説明に適中し得たるやう見ゆ。是に於て吾人は先、美の意義に關する吾人の穿鑿に於て、其の起原と効用の此の説明に趁る。此説明とは、美の實利説是なり。生ける自然界に於ける美の効力は、單に其の研究が容易に答案を與ふる所の此の事實に歸すべき物と考へらる。花卉又禽鳥の中なる諸の趣味ある實例に於て、吾人は其の美に或る効用を認知し得。吾人の美として見る所の或る線條又は彩色は、實際植物又は動物の爲に生活的利益を有するものなり。是故に此等線條、彩色は自然に淘汰せられ又増殖せられぬ。ダーウィン氏

が此の方法に由つて美の王國に接近すべき殆ど疑なき道を開きたるが爲に、一切自然の研究者が彼に負荷すべき所鮮少にあらざるなり。彼は自然が嘗て織るに倦まずと見ゆる所の美の被服の製造に就き、明白なる科學的説明を與へたる所の最第一人なりき。蓋此の製作に違なく見ゆる所の自然の原動力三あり。

自然美の此等原因の一は保護的色彩にして豫防色と摸擬を含む。吾人は唯此の原動力を記するのみにて足るべしと思ふ。凡の獵師は汎種の獲物を其の己を隠す所の草葉、樹葉から區別するの困難を知る。例せば普通の山鵲は落葉の灰色に、生葉の藍色及び黄色を雜へたる色彩を呈せり。是れ其の裝飾が、妙に隱匿の目的に應答せんが爲なり。是故に又埃及の曠野に住む鳥は、其の殆ど砂礫と分別し難きやうなる色彩に斑點せられ、隈取られたり。是れ日光赫灼たるが下にすらも、此

の砂礫の間に隠家を得んが爲なり。鳥の諸部の羽毛に於ける美妙なる彩色や、隈取や、豊富なる雜色は、明亮に自然淘汰法の下に於ける其の保護的價値に原因せるものなり。色彩の有用なる模擬は、昆蟲の内に最も精巧完全の程度に達せり。例せば正に一點の露に似たる膏蟲あり、精密に熱帶地方の木葉に似たる胡蝶あり。其の胡蝶の二匹も、其の描寫の相似ざること正に二葉の相似ざるが如し、同時に其の或者は昆蟲の侵蝕又は植物的霉黴の腐蝕に由りて生せし木葉の記號をすら摸せるありき。(フレイスマ氏「ダーギン主義」百九十頁)

自然美の發現と其の特色とに關する他の原動力をダーギン氏は性的淘汰に發見したり。此の中に色彩と記號と認識の目的に出でたる明亮なる鳥語とを包含す。美の此の理由の證據に追加すべき事實は、動物生活の小説に屬す。ダーギン氏記して曰く、或ひは自然の状態に在

り、若しくは禁籠の中に在る所の鳥の習性に細に注意したる博物學者は皆其の雄が己の美を彰はすを樂むと云ふ説に於て一致す。吾人は茲に自然界の求婚史の一章を讀むなり。蓋は華美なる若くは斌媚的、誘惑的運動、頸及び胸の羽毛の膨脹、裝飾せる冠優美なる羽翹、嫺雅なる耳總、美麗なる頸毛と頸輪、金色の斑點、又は華麗なる羽毛の反映等、の爲に誘はれて、雌鳥は、穿鑿的科學が發見したる如く、其の雄鳥を撰擇し、其の幸福なる撰擇に由りて、初に己の小さき意中を贏ち得たる其の羽毛の美を、其の雛兒に傳ふるの傾向を有す。吾人は諸鳥の方法、並に其の苦難、困難、共に斯くも明白に人的なる所の求婚と戀愛とを、吾人に紹介する所の科學の言を聽くを喜ばずんばあらざるなり。其の方法とは少くとも芝生に於ける會合、舞踏、道化、安靜なる隱處に於ける隨時の會合を含む所の鳥合ひの方法なり。此の間に一切心を引く所の技藝は

悉く演ぜられ、其の進行の際に或る雌鳥は全然目盲し耳聾せりと見ゆるまでに心を奪はれ、或る者は殆ど狂せんとし、同時に競争者は往々争闘するに至る。而して又此の如き景場よりして、殆ど吾人の人的方法と同じく、或る雄鳥は陰鬱なる失望の爲に、或る寂閑なる地に退き、又或る雌鳥は餘り多く提供せられし引力の中に眩惑して、撰擇の機会を失ひ、獨り遁れて寂寥なる所を求めて其の獨身を葬むるらし。如上の人的習慣に於ける吾人の智識に由りて、ワレイス氏が、歴代の雌鳥の數百が必ずしも自然が彰さるべからざる美色と記號との一定の模範に傾向せずして、寧ろ諸種の混合及び斑點的雜色的の美を呈現するに傾向せるに非ずやとの疑問を提供するに當り、其の疑問の寧ろ甚だ蓋然なるを發見す。(ダーギン主義第十章)

ワレイス氏及び大抵の博物學者が、ダーギン氏と與に力言する所の第

三の原動力とは植物の異花受胎に於ける色の効用其なりとす。之れを説明するはダーギン氏自身の歸納的總括に如く物なし、彼曰く「花は自然の産物中最も美なる産物の一なり、然れども此等は青葉の對照に由りて顯著となり、其結果同時に於て其の容易に昆蟲に由りて觀察せらるゝほど美となるなり。我が此の結論に到着したるは、花の風に由りて受胎したるとき、華美に彩色せられたる花冠を、有することなしして、不易の規則を發見したるに基づく。是故に吾人は若昆蟲が地の面に發達せざりしならば、植物は美花を以て點せらるゝことなく、反つて樅や檜や栗や秦皮（トウモロコシ）の樹、又は雜草、波稜菜（ハルカキ）又は酸模、蕁麻等、一切風の作用に由りて受胎する物に於て見る如く、賤しき花のみを發くべし」と(原種論)。是は昆蟲の生存に對して想像し得べき最善の辯證なること確實なり。

略此の如き物是れ生ける自然界に美の生起し發達したる實利説なりとす。此の説は多大数の觀察に由りて維持せらる。其の少くとも許多の奇異なる順應に適用すべきこと、其の一分的眞理なることは、決して拒絶すること能はず。然れども此の説はダービン以後一層精密なる觀察に由りて、諸の批評を受けたり。而して又之より倍大なる疑問の猶未だ進化論者の有らふる著述に論せざるあるを見る、曰く、是れ果して十分なる美の説明なりや。自然界の一切美的現象を包含するほど廣く及びたる學説なりや。此く問ひ來れる問題は、花鳥の中なる美の自然的起源に於きし、ダービン氏の説明の細目を、單に批評せるによりて提出せられたる疑問よりも、一倍根本的なりとす。美が植物、動物乃至人類の生存競争に或る功用を有すること明かなるを許諾し置きて、吾人は更に進んで更に深く穿鑿せんとするなり。美の實用は美の

十分なる原則を説明するに足るや。事實の立證する限、自然が生命の維持と勝利との爲、經濟的に美を利用せることを許容することも、此の美の實用は自然界に一切充溢せる美を説き盡せる物なり乎。若くは吾人は自然の心に接近して、美其物の美なる爲に、美を喜ぶ、自然の愛を發見すべからざる乎。汝は美に就いて他の何等の説明を與ふる能はざる乎。是れ生物學者が輩に就て一疑問を發せしときに問ひし所なり。然れど吾人をして先花卉の中なる美の實用に就て、彼の智識の何處まで到達せるかを觀せしめよ。吾人は美が明白に功用を顯はせる野原に於てだに、尙且一切の美が實際其の實用によりてのみ、説明せらるゝこと能はざることを證する所の許多の特例を記述し得。

一事を擧ぐれば、許多の植物的、又動物の形體の構造に於て、生命の功用

に何等の明白的關係、又は想像的關係あらざる線條、記號、色彩に就き、此實用説は十分なる説明を與へざるなり。例せば有孔蟲の如き、生命の微細なる形體に於て見る所の殻の構造の精巧なる比例、鈎鐘蟲の彫刻は、恐くは此の如き技藝美に由りて利益を得べしと云ふ實利説に由りて容易に説明すべからず。蓋は斯の如き生命に於ては、殆ど見るべき眼、牽かるべき女性無ければなり。(サンデマン氏、生物學の問題、百三十一頁—百三十二頁)是は又生物學者が闇黒なる大洋の底を浚渫して採取し出せる所の、諸の完全なる、佳麗なる形體に就いて、特に眞實なるべく見ゆ。例せば吾人は數代の間千九百尋なる大洋の底に藏れて、其の模様之の精巧なること、恰も細線さいせんの如く織く巧に織り成されたる所の珊瑚の斷片を見るべし、——之を見る最第一者は人の眼なり。「挑戰者」の航海に於て海底より採り上げられし該種の珊瑚の一は予が之を示し

たる所の小兒が叫びし如く、正に薔薇畫の窓の如し。其の中心に於て一の星の如き模様ありて、輝く數條の精美なる繪様窓格子と、圈狀の模様之の隈取と、之が周縁を環れり、——此の珊瑚片の縮圖的彫刻に基きて、寺院の窓繪も描寫されつべきなり。而も此の珊瑚面上の隠れたる美の上に、何等光線の照臨する無かりき。抑も何等預想すべき功用ありて、此の完全なる意匠の存せるなる乎。化石的形體の中に裝飾的線條を帶べるもの亦然り、恰も教授セイラーが此等に施せる所の研究に由りて「實用を超絶すること遙かなり」と宣言せるが如し。彼は之を取りて「人的想像の製作」に比するまで、此等裝飾の「時樣的動機」なるに感動せられぬ。(個體、三百十五頁——三百十七頁)。

種々なる色素及び光學的色彩の、下等有機界の過程を通して起るを見る。微菌は展驚くべき絢爛なる色彩を顯はす。藻類は種々なる色素

を包蔵す。其の一種の淡紅色石竹的葉狀體の、夏月の間、海岸に投げ出されたるを、吾人は往々發見し得。海白頭翁、海月、珊瑚の透明なる色は、好く人の知る所なり。又然までに熟知されたるに非ざるも、之を知れる人に魔力ある美を有せるは、蟲類、紐蟲類の一大聚群の色彩なりとす。之が研究を行ひたる一専門家は記して曰く、或る標本の種々の部分に於ける色の配合の巧妙なること、之を忠實に模寫せんとする技藝家の、餘程の熱心と熟練とを要するほどに巧妙なりと。

是故に彩色圖案は自然の秩序の部分にして、本性なるべく見ゆ。美は自然の本原的、又組織的記號なりとす。彩色は要素的、結構的なり、而して又生理的なり、美は上等生活に進むべき競争の爲に功用を生ずるに先ちて、既に生命の根本的要素たるなり。別言すれば色彩は生命が生存的價値を得るに先ちて、既に生命的價値を有す。

秋季の着色も亦功用に對する何等直接なる關係ある無し。是は其自己に於て樹木に利益あるに非ず、或は樹木に利益ある植物過程の偶然なる結果と考ふることを得べし。然れども是は自然が時ありては放浪的に森林に浪費する所の、偶然の美にして、少くとも單に自然淘汰の結果としてのみ考へ難かる所の創造の格外的、餘剩的偶然なりとす。若萬物は嚴格に自然淘汰を吟味したる上にて、美が實用なりと證せられたる所以外には、生ける世界に於て美化することなしとせば、美は必ず其の功用ある所に發見せられ、其以外には發見せらるゝこと無からん。然れども事實として吾人は實用を有せざる美の存在せることを發見し、又其の美を缺くにも拘らず繼續する所の、稍顯著を缺き彩色乏しき形體を發見す。是に於て自然の事實は此説よりも大なりと見ゆ。例せば多數の顯著なる花は、其の異花受胎の必要の爲に、昆蟲の訪問を

待つこと無し。是故に斯かる場合に在つては彼等が其の光采ある色彩を、昆蟲を吸引するが爲に得たるものとする。能はず。然れば彼の馬利筋屬は其の大度彩色叢簇を以て有名なる花を發き、尙且自個受胎的なりとす。其の絢爛なる美の由來は之を昆蟲を吸引して受胎せんとする其の有らざる實用の爲と云ふより、他の原因に歸せざるべからず。此の説に由りて見れば、此の如きは無用、無趣意の裝飾と謂はざるを得ず。此の外植物の許多部分の裝飾は、其の植物の爲知るべき、考ふべき何等の實用を有せざると、恰も劍欄の彫刻の、劍を造りし目的に於けるが如く見ゆ。多數の花弁の中には巧妙なる記號、纖巧なる隈取、混色、邊線、斑點等あり。是は其の密に蟲を導く何等明白なる援助とならず、唯其の完全なる美が吾人人類の眼の爲に存せるのみ。調和せる彩色よりも寧ろ顯著なることが、可憐なるよりも華美なることが、異性

受胎の用に適せるよう見ゆ。植物の中昆蟲の棲らざる部分とても、自然の畫筆の觸れずして遺る所なし。多數の葉の裏面も、完全なる細工を顯はし、葉脈は巧妙なる模範を呈し、同時に幹も亦往々自個特有の美を以て彫刻せられ、裝飾せられぬ。吾人は更に或る唐草様の植物の富麗風を喜ぶ蘆の優美羊齒の詩様滑かなる莓苔を以て岩石の露骨を掩へる温和の光景、地皮の微妙なる蝕蝨に就て何をか言ふべき。——恰も自然が其の内心に美術家的本能を藏匿し居て、一物に逢ふ毎に之を裝はざる能はざるが如く、其の建築術の威力が、太古の石や花剛石の上に未來の花の暗示を投射し、植物菌、又芝桶にさへ香氣を附與せり。今明白に非實用なる所の美に就て、吾人は猶更に普通の莖の例を引くべし。——効用の爲に存せず、其自身の清淨の爲に存するの美なり。此の植物の一變種は二種の花を有す、一は顯著なる物、二は顯著ならざる

物なり。此顯著ならざる花は他の華美なる花の悉皆代謝したる後、夏より秋の間に莖の中に發現す。一方の花、顯著なる花、吾人の小兒が春時楽しんで之を聚めんとする花は、己に利なる一切を有す。——其の蜜、其の色、諺となりたる其の香等、——而して蟲族の最も嬉戯し活動する其の時期に於て、其の訪問を受くる爲に紺碧の羽を開く。他は之に反せる一切を有す、即ち顯著ならず、香氣なく、醜惡にして閉塞せり。而も孰れか最も成功する乎、孰か最も種子を生ずる乎、顯著なる花に非ず、顯著ならざる花に在り。勝利は醜花に在りて美花に非ずと。〔千八百七十九年ヂャステス、フライ氏時代評論第三十六卷五百八十一頁〕是故に茲に議論興らざるを得ず。然るに生物學者は答へて曰く、記實は眞なるも議論は公平ならず。莖や或る他の花卉の受胎に於ける勝利は、美と醜との孰にも屬せず、寧ろ其の特別なる時期に於て最も周圍に順應す

る花の種類に屬すと、而て彼は吾人に告るに自然は此の關係に於て大なる順應を顯證せること、自然は境遇に準じて其の植物の生命を維持する二個の方法を有せること、此の二個の一が其の或る位置、時期に最も有効なるに隨ひて交迭すること、例せばアルプス山の植物は、昆蟲生活の豊饒なる低處にては、顯著なる花を有し、其の受胎の爲に彼等に依頼し、昆蟲の訪問不十分なる高處に在つては、其の閉塞せる醜惡なる陰微なる花の中なる自個受胎の別法を採用して、以て其の生存を維持することを以てす。ワレイス氏は其の必要に隨ひて其の習慣を變ふべき或る植物の此の能力に就て議論せり。

生物學者が大凡此等異種の花の實用に就て、觀察する所を注意したる後、吾人は此の如き議論の到達せざる所の一等深き疑問に接觸す。此の疑問の中には恐くは吾人が既に觀破し得しよりも、一倍單純なる美

の真理の暗示が横はり居るべし。吾人をして再び問はしめよ、自然は何が故に其の受胎に就て此の如き二重の方法を採るべきほどに放蕩なる乎。何が故に自個受胎の廉價法の既に十分なる境遇に在つてすら、色彩の此く浪費せられたる花の上に、昆蟲の訪問を受けて、異化受胎する所の此の高價法が發達せる乎。何が故に自然は此の高價的裝飾法を固執して、之を維持して、以て其の其の唯餘りに騒がしき野原の間の、其の纖弱なる生存を保つ能はざる處、又其の植物がアルプス山の寒霜の中に生存せざるべからざる處に於てのみ、其の妙香の花を棄て、其の閉ざせる平凡の花に歸らざるべからざるまでに及ぶや。自然は何が故に此の如く甚だ高價なる方法を發端せんと欲望したる乎。植物生活は既に一倍廉價に維持せられたり、此の豪奢なる方法は何が爲なる乎。

此問題の此疑惑はワレイヌ氏の許す所となれり。然れども彼は此の自個受胎(平凡なる、經濟的なる花卉の方便に由れる)と、異化受胎(一倍顯著なる、豪奢なる花卉の方便に由れる)との兩法が、均しく變更する境遇の下に植物の「體力と受胎」の爲に必要なることを論ず。「ダーギン主義」三百二十一頁然れども此の事實的説明あるにも拘らず、其の高尙に複雑したる方法と「此く高價なる建設的變化」を以てせる異化受胎が、毎々自然の無用豪奢なる方法なるべく見ゆ。花の上に浪費せられたる美が、一切到る處に十分經濟的なることを證せんことは、自然淘汰の最も冒險的なる辯護者にも困難なりとす。自然は原野の花卉の中に、其の美色を撒布するとき、美の幸福なる浪費者の如く行列せるらし。美なる自然は植物の生命の理由の外に殆ど或る價值を有し、又之を維持しつゝあるかの如く見ゆ。自然は其の全心を以て己の美なる女メに

執着せるかの如く見ゆ。或は謂はん是は詩にして科學に非すと、然れども吾人をして更に進んで觀察せしめよ。

美の起原が實用に基くと云ふダーギン氏の學說——唯一部分の眞理の不妥當なるは、更に他の或奇異なる經驗よりしても明かなり。是の經驗は此の事件に就きダーギン氏の忽諸に附せし所の他の方面、即ち此の疑問に關して昆蟲の方面より輓近科學的に行はれたる物なりとす。昆蟲の眼は輓近に至つて始て檢せられ、其の美を評價するの能力續密に驗せられたり。此等の經驗は或る程度までダーギン氏の、見解即ち顯著なる花が、——バアレー氏が之を呼ぶ如く、昆蟲青年の訪問を吸引すると云ふ見解を肯定す。然れども之に反して昆蟲の訪問の能力の試験は、花の美に對する此の學說の不妥當を證示す、蓋は花卉の精美なる彩色完全なる佳麗の間に差別を行ひ、随つて之が自然淘汰を生

るに足るはご良好なる眼を有せず。ワレイヌ氏は昆蟲の色覺に、吾人の美學的感覺と一致したる所あるを證せんとして其の證據を得ず、其の結果、昆蟲は單に美其物の爲に花卉の上に何等の撰擇をも施すこと能はざること認識したり。彼曰く「大凡既に舉證せられたる事、又舉證さるべく見ゆる事は、昆蟲が色の差異を認識すること及び各自の色彩と、己の要求を満し得る所の花卉又果實とを結着し得る是なり」と。

(ダーギン學派三百三十六頁)昆蟲族の訪問に基く花卉の淘汰は、或る程度まで明白なる記號を有する花や、色彩の認知し易き花を生ずるを助くる爲、花卉の發達に對して其役目を務むるのみ。昆蟲は全然色盲に非ず、然れども最も單純なる花の佳美の中に蝴蝶の注目せざる物甚だ多し。佛國の生物學者教授バラチーは近者其の寄書に於て、昆蟲が視覺の爲に吸引せらるゝとなしてふ説話を確定すべき許多の觀察を提

供したり。其の觀察せる實例に據れば、受精する昆蟲の蜜を有する所の花卉を訪ふに、其の植物の表面的組織(譯註、花卉)の爲に著く吸引せらるると云ふこと無し。同時に此等の花卉が移轉さるとき其の花弁を訪ふ所の昆蟲の數に著しき變更を見ること無しと。二千八百九十九年王立顯微鏡協會雜誌二百九十八頁、一千九百年三百十九頁此等の觀察家は色彩は決して昆蟲を花卉に吸引する第一原動力に非すと云ふことを結論せり。「縱令花卉が其の色彩の爲め若くは其の周圍との對照の爲に、昆蟲に由りて遠方より明に認知さるるにせよ、其が一たび其の花弁に飛び達するや、彼等は其の色の何——青、赤、黃、綠、白——なるかに向に無頓着なり。此等の花卉が若他の關係に於て相互に異なるに非ざれば。蓋辛辣なる臭香は異花受胎又は性的淘汰に誘導する爲、花卉又は動物の色彩よりも有力なり。雄蛾の如きは殆ど信すべからざるほどの遠距離よりして、雌種の蛾に引き誘はれ來たるは、能く人の知る所なり。

美の起源と發達を單に實用の理由にのみ歸するダービン學派の學説は、消極的實例に對するベイコンの「注意の規則」を守ることを過てり。是は一部分の眞理なり、然も唯一部分に於て然るのみ、此の説は一切花卉の美妙、一切禽鳥の中なる羽翮の華麗を領解することなきなり。約言すれば實用説は或る美を説明すれども、完全なる自然界の美を説明するに足らざるなり。是に於て植物學者は順番として問ひ來るべし、若し美が自然淘汰又性的淘汰の原則に由りて説明せられずとせば、汝は能く之を説明するを得るやと。吾人は答へん、茲に猶或る忽諸に附せられて未だ知られざる所の進化の原動力之あるに非ずやと。

植物及び動物の彩色の説明として、自然淘汰説の不適當なるは、多數博物學家の認知する所にして、彼等は皆其の起原と發達との爲に他の倍深の理由を穿鑿せり、——其の實用は其の生存及び發達の第一原因又は有効原因としてより、寧ろ偶然的の、第二の順應と考へらるればなり。最近の觀察は彼の植物學の大家、教授アサ、グレイが千八百八十二年に發表したる所の徹底したる説明に、何等の變更を加ふるを要せざるなり。曰く、「茲に明白なる事實は吾人の花苑の美麗のため、吾人の原野の美妙のため、蜂に負ふ所あるは猶吾人が書信の爲に郵便配達人に負ふ所あるが如し。通信は彼に由らずんば遲滯すべく、過失を受くべし。然れども是れ單に機械なるのみ。機械は通信の作者に非ず」と。〔時代評論第十一卷六百六頁〕彩色は近時の多數の穿鑿家に由りて單純なる實用的學説が想像したるよりも、一倍密切なる關係を、進化に對して有

せる物と識認せられたり。色彩は即ち構造上の事實なりとす。美の生理學上の線條は是の故に存す、自然の全體に亘れる色彩圖案は、進化に於ける原始的、組織的原動力たる其の第一義に於て新に研究せらるゝを要す。人或は彩色の能力を以て原形質の内住的性質と考へ、同時に自然を一貫したる其の彩色の發達を、其の内住性質と熱及び温度の如き外部の境遇に歸したり。蓋自然の彩色圖案の中に全たく生命的實用に關係なき階級あり、——物質の組織に於て一定したる又既定されたる所の階級なり、(エム、アイ、ニウピギン嬢の「自然の色」に説明したるシムロース氏の説を見よ)。吾人若ブлатー派の哲學者と與に宇宙を神の觀念として考へば、美色の發達に於ける生理的智識に忠實ならざるべからず、若美が其の觀念の中に内住したりとし、又其の顯現を宇宙の根本的、永久的要素の一に於ける神の觀念の默示なりと言ふべく

んば。

保護色の製作に於ける自然淘汰の此の第二の任務は、更に輓近の學者が有機物體の寫真的感性に之を歸する所の信すべき論證に由りて指示せらる。此の寫真的感性に由りて、有機體は寫真版に於てするが如く、己の表面に其の周圍の色彩を再現するならんと云ふ。而て幼蛾が其の周圍に類似せるは、其の錦繡を織る感覺的編成の手段に由りて、其の周圍を寫すが故として暗示せらる。〔ニウピギン嬢の「拔萃論文三百十二頁」〕

且夫吾人は若美の實利説の、美が功用を顯はすやう見ゆる所の狹隘なる區域に於てすら、尙且然かく不妥當なるべく見ゆるとせば、吾人が進んで自然界を一貫する美の全き程度と其の過剰とを測量する時に、其は全然破壊せんのみ。此の説や地の上、天の下なる無量の形體、按排等

の吾人に美の印象を與ふる事物に、一も適用すべき所あるなし。吾人は美に對する宇宙の此の傾向を説明する爲には、更に自然界に向つて探求せざるべからず、吾人は美が構造的線條に顯はれ、要素的群簇に包まれ、創造の一切の秩序を一貫して、隨處に遍滿するを發見す。自然は其の原素に於てすら美なることを禁ずる能はず。其の最初の運動に於て、既に美の線條を追ひ求めぬ。自然は美の中に組織せられたり。例せば其の見るべき最微なる分子的結合の均齊と優美とを考へよ、汝若顯微鏡界に於て結晶の過程を注目せば、汝は茲に美の原始的發揮をすら目撃すべし。結晶の過程に於て、原素的意匠は巧に織らるゝ、花布の如く開展す。茲には硫酸鹽の構成に於て美あり、是は其の實用の爲にも、其結晶體自己の爲にも、又吾人に對する其の藥劑的效能の爲にも、何等の特別に、撰取せられたる功用を有せざること固より確實なり。

茲には元始に於て、既に世界の原素に構成的の美あり、恰も均齊的、着想的意匠に出たる美の如し。吾人は窓版の上に置く霜に於ても、雲より翻り降る雪片に於ても、自然の此の原始の美術的傾向の痕跡を認む。吾人は地底の泥土より篩ひ得べき、若くは其の表面の青泥よりして聚集し得べき所の最下等の植物的形體にすら、原素的、又宇宙構造的の美を認むるを得。植物界に於いて最微物なる硅藻すら、顕微鏡の下に見るに足る所の巧妙なる記號と限取とを啓示す。不潔なる水流に漂ふ青泥より取りたる水綿屬の細線にも、螺旋狀の、緑色の、佳美なること頸飾の如き一線を、吾人に啓示せり。眞珠の一線も草の内なる或る線と色珠とに比すれば殆ど見るに足る物なし。

自然は最微なる物に於てすらも美なり、吾人が美の無限小の完全よりして倍大なる光景に眼を遷すとき、彩色の倍廣なる聚會、自然の手に成

る建築の一倍莊嚴なる比例、美に對へる同一の不可遏的、宇宙的傾向、吾人を繞りて隨處に羅布して己を啓示す。日は日に向ひて言を傳ふ、自然は聲なく語なく、其の言——此の美の神聖なる言——聞ゆること無し。吾人は顕微鏡に由り、分光鏡に由り、望遠鏡に由りて均しく美を見る。吾が眼を開く所に之を見るなり。熟練なる彫刻家の手に成れるが如き、微塵の貝殻に見ゆる寫眞銅版は、大建築家の觀念に出たる如き、星宿の榮光の崇高なる均齊と匹敵す。七色景の線と色とは、其の三稜鏡に由りて吾人の前に呈示せらるゝとき、諸の天が吾人の眼に其の莊嚴なる秩序を顯はす所の啓示と匹敵す。圓滿なる丘陵、高潔なる山嶺、佳麗なる溪澗、原野に横たふ光と影、晚雲の華麗、曙光の神聖なる美——舉りて自然の中に内住せる美の原則の現在と能力とを宣ぶ。將た醜の一時的存在あるが爲、美の此の宇宙的存在を非認するを要せ

ざるなり。美を缺きたる多數の物體あるが爲に、若美が其自己の爲に存在すと謂は、亦醜の説明をも提供せざるべからずと、ワレイス氏が論ずるに當つて、彼は醜の一時的存在と云ふこと知るべき論を看過したり、此れ自家の實用説が彼に供給したるべき物なり。蓋は稍美を缺きたる形體が、一時寧ろ有用なるあるが爲なり。岩に傍ひて生ふる楓は岩の罅隙に些の土を求むる爲に、其の根を卒爾に岩の縁に曲ぐ、是は山間の溪流に縁りて徑直に又佳麗に生長せんとする此の楓樹に取りて利益なるが爲なり。然も是は其の一倍膏腴なる土壤に生長するに當りて顯はす所の優美なる彎曲よりも遙に劣れり。拙劣なる形狀、質素なる色彩、乃至一時の積極的に醜怪なる現象すらも、吾人の之を瞰下する時は、進化の中に緊要なる役目と位置とを占む。是故に自から其の必要なる間、撰擇せられ、維持せられたるものなるを發見すべし。然

れども美に向へる傾向は恒存なり。且夫自然は決して長く醜に耐ふる能はず。自然は隨所に嫌厭すべき状態を和げ、頑梗なる物、荒涼なる物を着色して、少くとも之を快化し、若一切の手段の盡きたる時には、之を人目より葬むるべき傾向を有す。自然は其の無盡の華美を顯はさんとするかの如く、平凡なる景色の上にも猶榮光ある光彩を發す。農家の戸より田舎の通路を眺むれば、通路其物には何等佳美の觀なきも、其の地平線上に當つて一切を美化する所の夕陽を見るべし。自然は平凡の中にすら、醜は其の心に反對せること、美は其の最初の愛にして自ら一切の勢力を擧げて之を追ひ求めつゝあることを、毎日吾人に教へんと欲せるが如し。其の強猛なる血氣、其の破壞的精力、並に其の日光、其の白露、皆均齊と優美とを生ずる爲めに働くものならざるべからず、——水流を閉づる所の霜と、冬の景色に己の新しき美を與へたり。

噴火口すら鬱黒嫌惡すべき荒潰的煙突たるに非ず、其の破壊的惡靈も豊かなる鶯色、赫色、黄色、乃至金色の微光、及び其の噴き出す所の龜裂せる熔岩の壁を以て装はれたり。教授チンダルが荒涼なるアルプス山の絶頂より、其の太古の惡魔の帝國を測量しけるとき、殆ど宗教的畏懼を以て驚愕したる所の破壊的勢力は、土角を化して、雲を貫く美の剪幹となしたり。而してジョン、ラスキンは其の美術家的慧眼を以て、諸山の瓦解が、尙且種種なる勢力に由りて、美なる曲線の法則の下に起れることを觀察したるとき、如何に不可遏なる美が自然の中に之あるかを吾人に教へたりしか。彼曰く、薔薇は其の柔和なる發達法に由りて圓くせられ、葦は風の壓力によりて軟かなる曲線に曲げらる。然れども自然は此等山嶽に於ては一倍明白なる其の意志の證明を與へたり……自然は正に曰ふやう見ゆ、吾が活動には、發達も、蘊蓄も、乃至柔和も

必要ならず必要なは、唯彎曲之のみと。若我此等の山岳を破壊して、吾が欲する所の形狀に之を造らば彎曲の中に折曲あるべし。若露と日光の代に我が用ふべき機械が、唯電と霜とに止まらば、其の又狀の舌と、其の結晶せる楔は、猶吾が柔線の法則として有用ならん。吾が一切原始的事業は、養育に非ず破壊なるべし。世世代代我唯改革なき滅亡を延長すべし。然れども一切被造物の上に行はれたる所の模表的美の設備は、之が爲に棄つべからず。岩は其の永劫の死に於て、葦の彎曲と薔薇の赤色を指導する所の其の規則に由りて、支配せらるべしと。

〔近世畫家第四卷第二十五章〕

然らば自然界に於ける美の十分なる説明は如何、美の自然進化は何を意味する乎。吾人は答ふ、是は理性に由りて存し、理性の爲に存すと。理性に對する理性の發表なりと。美を思惟し、美を愛する所の睿智が、

之を認知し之を享樂する所の心に與ふる啓示なりと。此の如きが、若くは之より以下ならざる物が、美の使命にして又其の意味なりと。吾人の科學は美の開展の法則を追跡し得、或る程度まで生物學は其の進化の法則を發見し得、然れども美は睿智に對する、睿智の永劫の默示なり。自然の原素の中に起りたる美の原則は、世界の主要なる觀念の一なり。隨所に美的に啓發し、發花する所の自然の傾向は、自然自己の理性的、道德的方向を指示す所の進化の主要なる特質の一なりとす。

人或は謂はん、自然美に基ける此の大議論の、未だ波及せざる一全面あり、——其の生理的方面是なり。或は問はん、吾人の美學的感覚、美に對する吾人の認識と快感とは如何にして説明すべき乎と。是は其の起原を單純なる實用に歸せざるを得る乎、美は吾人の之を理會するに當りて、全く單純なる生理的事件に歸せざるを得る乎。然れば或る記者

は此説に答ふるを得べし、例せば某著者が安然に斷言して曰へるが如し、曰く美に對する美學的感覚は、生命的官能と直接に關係せざる過程に於て、疲勞と缺乏の最小額を以て、刺激の最大額を與ふる物として考へらるると、——是れ美の享樂に於ける完然なる自然的説明にして、汝が高山の絶頂に登りて四望するに當つて、汝の生理的心情の發し來らんと、とき、精神の雀躍する際に此の説明を思ひ興すべきなり。

生理學が、美の感覺性の進化に貢獻する所ありしは疑なし。吾人をして又心理學の生理的實驗室に於て、事實の決定せられ得る限り其の事實を採用せしめよ。吾人の美學的感性は光と響の最下等の有機的知覺よりして、斷絶なき連續として進化し來りたるなり。吾人は今必ずしも此の發達の順序を追窮せず、是は猶ほ未だ試験的、不完全に行はれつゝあるなり。然れども其の行はれたる限に在りては、美の進化の二

方面、——一方に於ては自然に於ける其の獲得、他方に於ては之を認識すべき有感的審知生命の能力——は一齊に併行せり。一の進化は他に配偶す。二者の配偶は審知的方向の他の徴候なりとす。兩者——世界の色彩、音楽と見る所の精神、愛する所の心情と——は、今人類に顯す自然の美の最後の默示に於て遭會す。自然の默示は一個完全の進化なり。是故に美としての其の特性は、深き精神的意義を有す。生理學は美が由つて以て認知せらるゝ所の方法又機構と關係す、生理學は何等自然界の理性に、又其の理性に對して、關係する所ある無し。吾人は吾人の意識内に起る外界の大なる變化に就き最も老成なる生理學者が、吾人に示し得るよりも多く知る所あらんことを欲す。音響又は光線の波動が、如何にして吾人の人的意識の岸邊に打ち寄せて、以て之を音楽、色彩として認識し享樂せしむるに至りし乎。是は恒に智

識の謎なりき。如何なる魔術師が、其の威力ある杖を以て、感覺の門戸に立ちて外部の運動の世界を、吾人の意識内なる形體や、香氣や、調和せる音響の世界に變化したる乎。此の如きは吾人の思想に取りては、實に自然の化體と謂ふべき不斷の奇跡にして、唯吾人が之を認めて以て自然を貫きたる心から、心に對して、規則的に、秩序的に通信する物となすときに、其の奇跡たること始めて止む。自然美は吾人の外なる「心」から來るが故に、吾人の内なる「心」に由りて感知せられ得。美は心に於て組織せられ、心の爲に組織せらる。美は單に精氣的波動が眼の網膜色素素の上に打寄する事に非ず、若し光線が徒眼の中に留まるならば、決して美の人的感覺あるべからず。光線が美として感知し享樂せらるゝやう受領せられ、變化せられ、組織せらるゝは、見る所の心に由る。美は之を見る靈魂あるに非ざれば、何等の存在あることなし。美は、變化

する物、見るべき物に由りて現象せらるるといへども、其の實體に於ては不可見なる物、永劫なる物に屬す。然れども吾人は此の疑問に就き、心理的方面に進ませざるべし。見よ哲學の諸大家——彼等は猶吾人に與せる者に非ずや。自然の生命の經濟に於けるダービン派の美の實用の法則を説明し、確定する爲に、甚だ勞したる彼博物學者は、其の美の説明に於て、亦此の許諾を爲したる輩の中に在るに非ずや。彼説いて曰はすや、色彩に由り音楽に由りて興されたる情緒は、均く純粹なる實用主義に由りて發達したる世界の平準以上に出るやう見ゆ」と。(自然の區分第四百十九頁)。

吾人をして既に追求したる思想の過程を總計せしめよ。美は自然の秩序の宇宙的性質なり。自然界には美に對する傾向あり、自然は惟れ美ならんことを欲す。生物學は或る程度まで如何に必要と美と一致

せるかを説く。美は屢次又多方に於て生命に利益なり。是故に美は淘汰せられ、増加せられたり。自然神學は少くとも部分的に自然が如何に其の色彩を混ゆべきかを證明す。進化は自然が如何に其の多色の絲を豊富なる生命の衣裳に織りたるかを指示す。然れども美は猶之よりも多剩なり、生命の需用に超過せり。美は自然に於て原素的、構造的、組織的なり。大哲學者カント曰く美の人的感覺は非利害的感覺なり、吾人は美自身の爲に美を愛すと。同様の非利害的性質は、美としての自然其物の性質に歸するを得、佳美は其の實用以上に、其自己の爲に存す、美は是れ自然の目的なり。生命が進化の目的と稱せらるべきが如く、美は亦均く確實に自然の目的と稱すべきなり。是故に自然美は物理的形體よりも、以上なる物として考ふべし。美は正に自然の道德的光景なり。吾人の美の感覺の中に智性的關係あり。

美は單に肉眼に顯はれたるより以上の或物なり。然り美は心によりて感覺せらる。カノン、モズレイは恰も好し「自然」と題せる其の精妙なる演説に於て「美は觀らるべきものなりと云ふことは、自然美の意味として甚だ肝要なり」而して「是れ獨り理性に由りて見るべき物なり」と説けり。美は自然の構造の内部の理性が、理性に對して、隨所に顯現せる他の特徴なりとす。美は之を見るべき人間の心の在る所に知られんと欲する、地の上、天の内なる默示なりとす。美は自然の表面に於ける神の表情なりとす。此以外に理性的なる何等の説明あること無し。之より淺薄なる理會は不妥當なり。合理的、精神的意義を有せりと見る自然美の高等なる解釋は、其の進化の一絲をも錯ることなく、一切其の實用の科學的智識を包含し、同時に世界の一切美の心内なる單純、神聖なる秘密を看失ふことなし。是故に吾人は「美」と呼ばれたる門戸を

經て神の殿に入ることを得るなり。

吾人の推論の過程は、更に吾人をして一步を進めしむ。美の理性的、精神的原則の發見は、單に自然美の領域を以て終らざるなり。是は他の原則が爲す如く、有形的、無形の宇宙を結合す。此の美の原則も亦諸世界の全球を貫き其の唯一を組織する所の創造の諸大原則の一なり。此の原則は最下の形體より最高の天使的榮光に到達す。茲に巧妙なる硅藻の線條にも、結晶の均齊にも、百合の榮光にも、囀づる鳥の色彩にも、天空の華麗にも、人間の顔面に於ける精神的妙好にも、光を衣たる聖徒の神聖なる圓滿の美にも、一道の神の思想と美の愛と之あるなり。地の上天の内なる、有形、無形の世界の一切の美に就き、吾人は之が解釋の最後の一言、吾人の最上智慧の一語、として言ひ得る所は、猶小兒が晚

の空の美を望んで叫ぶ所に同じ、曰く「母よ我之を起すものゝ何なりやを知る、神其の底に在し、又其の中に在して耀けるなり」と。

第八章 個體の出現

吾人の爲に最上の趣味ある疑問は、吾人の人格的生命に關する疑問なり。此の洪大なる自然過程の中に在りて、吾人の渺乎たる此の一個體は果して何等の價值ある乎。吾人の自個意識は、唯自然の流過的回顧——自然自身が一刹那己の鏡面に向つて視たる——に過ぎざる乎。

其の鏡面自身滅ぶべきもの、其の上に現はれたる肖像は、唯一刹那の現象にして、其の現はるゝや否や消滅すべき物なり乎。若くは吾人の人格的生命は、自然の演劇的絶頂にして、其の効果内に永劫的價值より何等か獲來れる物あり乎。一切數世紀間の科學は、生命に於ける此の吾人の人格的問題の上に放射すべき、何等かの光明を有せる乎、否乎。

吾人の議論の次第に於ける第二の話柄は是なり、此の議論の積極的方

法を追求する爲め、吾人は先個體進化の事實に還歸し、而して後其の高
等なる意義を求めざるべからず。

人概して謂ふことを得、進化は其の世世の過程を通じて個體に對して
傾向せりと。實に自然の方向は個體の出現と其の時代とに對向せり
き。全體の運動は即ち此の道を取りたり。其の現代の絶頂に於て、個
體的人類が其の最高形態として立ち現はれ、其の面を上界なる或る
光耀に仰向せり。個體に對向せる此の進化の方向は、其の特性の他の
特徴として、吾人の注意を要求す。自然界の精力の宇宙的流發よりし
て、如何にして此の個體的存在の看破せらるゝに至りし乎。團塊より
個體の差別を生ずるまで、其の繼續的歩程果して如何。個體の特色は
何なり乎。自然界に於ける最上個體の出現に關して、何等高等なる特
徴——人類の到來、人の「子」の出現の特徵が指示されたる乎。古の預言

者の疑問を吾人は新なる科學的見解の點より再問す、「誰か彼の世を宣
べんや」完全なる個人の世は、果して何を意味する乎。

前章に於ける穿鑿と均く、此の穿鑿の部分に於ても、吾人は進化を通じ
て個人の過程を追跡し、其の或る繼續的階級を看破するに當りて、觀察
されたる事實の中に、吾人の答案を得んが爲に、煩勞を取りて穿鑿せざ
るべからず。

個體に傾向せる遼遠なる一條の歩程、先明白なる事件として造くらる。
然れども吾が物理学は今原素の由つて來る所の物質の原始状態に就
き、精密なる研究を行へり。

此等原素は自個を聚團に按排し、其の或る共同原因を暗示する所の相
互關係を有する物と觀察せらる。現時の推想的物理学に従へば、自然

は其の逸焉たる發端に於ては一にして多に在らざりき、而して又平同なりき。然れども其の一は多の母なりき。其の巨大なる荒漠なる平同より起つて差別の原則ありき。差別に對する内在的原始的傾向ありき。而して此の差別的形狀が確定して永久となれりき。天文學者教授ロッカーは原素の發達が星宿の中に追跡せらるべきことを硬然として主張せり。其の最近の著述「無機體進化論」に曰く、地質層が有機體形狀の進歩を證明するが如く、星斗が化學的形狀の進歩を證明するや否やと云ふ疑問に對する答案は、明白にして精確なり。曰く進歩ありと是なりと。(無有機體進化論)第百六十頁他の天文學者は此の答案に於ける教授ロッカーの信憑に一致せず。化學的天文學は猶未だ空中よりせる光の使命の一切の線條を傳へざるなり、——然れども進化が今無機體界にまでも其の原則を擴張し、星屑の中にすらも、又諸の世界の

化學的原素の秩序的發達よりしてすらも、進歩の證據を發見しつゝあることを知るは、趣味あり且教訓的なる事なりとす。

此の如き原始的原素の差別に由りて、個成の原則の最初の行動が起り來れり。一個差別的物件の出現は、其の渦輪なるか、水素の元子なるか、若くは其の何なるにもせよ、個成主義に向ふ長路の發足を標識す。是は一回起れば決して再び追跡すべからざる所の一步なりとす。此の一步に基いて、世界の始終を知る所の全知者に由りてのみ預見せられ得しよりも、數倍廣大に追究すべかりき。尙且有限なる智性は、今日より回顧すれば、之より興り來れる物を見ることを得、而して吾人の一たび回顧するときには、原素的發端よりせる個成主義増進の世世の行程が一條連續したる「靈」の道として見ゆ。

個體進化の過程に於ける一定の所得は、結晶の成りたる時に起れり。

自然は結晶の法則に於て明白に必然に個成を起せり。蓋は形體は結晶體に於て始て明白なる完全を得たればなり。晶化は自然界に於ける個體界の將に來らんとする通告として考ふるを得、晶化は物質の曠野に於て其自身よりも大なる或物の來るべき道を備ふ。結晶體は漸く衰へ、有機的細胞は愈盛なるべし。然れども自然界に於て多様にし、尙且均齊的構造を有し、永久に構成せられたる此の最始の結晶的所得は、預言的所得なりき。最始の結晶の其の完全なる均齊を以て造られたるは、一倍優等なる或物を起すべき明白なる進歩なりき。結晶的必要の到來の後、何等自然の進歩も、奇跡として見ゆることなし。晶化の行程と生命の進歩とを銳利に對照すること、及び或る生命力を證明すべしと云ふ想像上の靈的利益の爲に此等の對照を利用する事が、特別に神學活力論者間に流行したり。

鹽の結晶の成形が、活ける細胞生長と同一の過程に由らざるは勿論なり。兩者の間の差別は儼として存す、縱令一日耳曼生物學者(ブスキ)が、往々硫磺の結晶の成形に於ける或る線路は、細胞の分割に於ける或る線條に暗示的類似を帶ぶることを注意したるにもせよ。又晶化の法則が生命播殖の法則と一致せざること亦無論なり、自然の特別界に於ける特別の過程に、法則の一致決して之あることなし。然れども結晶と細胞との間の對照が、唯進歩の同一線上に於ける二點の間の距離を標識するに過ぎざるは眞なり。生命界に於て最微なる者も、結晶界の最大なるものよりは更に大なり。唯此は彼の爲に道を備ふ。結晶は來らんとする細胞の自然的預言にして無機界に於て個體に對向する進歩の目的を標識す。生命の新時代は既に到來しつゝあるなり。無機界全體の中より生じ得る物にして、金剛石の如く個體を有し、自個の

特性を有せる物なし、火雲、星斗、結晶に於ける一切分子の結合以上なる個體の過程は死せる世界には起るを得ず、而して更に新なる發點が或る倍高の道に沿ひて行はれざるべからず。——自然は星屑、又金剛石を越して進まざるべからず。若其の高貴なる召命の目的として、個成に向つて前進すべくんば。然れば進化に於ける諸大進歩の如く、吾人は茲にも亦觀察を用ひずして新しき王國の到來せしことを學ぶべきなり。

結晶の外、個體に對向する第二の接近は細胞に於ける物質の組織を通じて行はれぬ。此の「時代の嬰兒」其呼ばるゝに隨へばは、何等の科學も其の何日、又何處に生れしか、如何なる周圍の中に生長せしかを語る能はざるほど、其の起原に於ては曖昧なり。生命は吾人が其の系統を

追跡する限、猶父なき母なきメルキセデクの如し。其の縱令物質界の物なるにもせよ、其の高貴なる天職と奧義との故に、至高き神の祭司として秘密を以て覆はれたるやう見ゆ。

然れども吾人は此の點に於て生命の究極原因の大體の疑問を論せるに非ず、吾人は細胞組織に於て獲取せられたる個體の増加に注意を喚び起せるなり。細胞は單一なり、結晶の一個明白なる物體なるが如し。金剛石然り、星斗亦然り。然れども是は更に高等なる個體を標識する他の性質を有せり。細胞は變化の中にも自ら維持し得、其の物質の變化せる間に依然として存す。又能く己を改造し、而して又能く永續す。又能く其の同種を再生す。然れば再び教授セイラー氏の熟語を引けば、細胞は教育すべき物質なり。吾人は今物質の活ける形狀を個體化すべく見ゆる所の此等特殊の肝要なる諸性質の若干を、稍十分に説明

するを可なりとす。

吾人は今生物學的穿鑿の最も興味ある領域の一に進入し、同化作用即ち生ける物質の營養又破壞的過程を研究せんとす。此等過程は非常に複雑、紛糾したる物なり。草の斷片、又は原形動物は自個を滋養し、其の取舍する所の他の物質に由りて自個を維持す。然れども是れ如何にして然るやと問はんとき、吾人は最も混雜したる現象の連續に誘導せらる。加ふるに各個特種の細胞が己の食物を撰み、己の需要せる物質、更に嚴密に之を曰へば、自個維持に役する能はざる物質を斥け、若くは舍つる能力を彼に是に獲取したることは駭くべき事なり。例せば或る上皮の細胞は、己の周圍の滋養的物質から脂肪の微量を撰擇し、吾人の肉體の各組織的細胞は、普通の滋養的液體よりして己の効用の爲にのみ血液ある或る實物を撰擇す。吾人若更に細胞内なる生命の同

化作用を研究せば、吾人は其の生命的活動の全範圍中にすらも起る所の其の明白なる淘汰的變化を發見すべし。或る物質は細胞に採取せられたるに當り、既に其の内に包含せられたる或る物質と會合して、分解と再製とを受け、其の或る産物は無用として投げ出され、他の産物は細胞の原形質の中に残り、猶他の産物は核に移されて、茲にて他の變化を受け、其の變化に由りて又他の實物を結果す。吾人は此等の作用が如何に複雑なる過程なるか、——紡車の内に如何なる紡車が此の内に存するかを感知す。汝の凝目が顯微鏡大に減せられたりと想像せよ、然して猶其の彈機旋回點車輪が一切完全なる按排に維持せられて存するを想像せよ。——然れば汝は又之に由りて此の驚異すべき細胞的機構の或る觀念を得べし。然れども猶一步を進んで、一倍考ふるに困難なるに拘らず、此の顯微鏡的凝目は其の細胞的機構が單に精確なる

時間を守ることを想像するのみならず、猶更に絶へず其自身に油塗りて之を修繕し、定期に其自身を巻きつけ、猶此以上に其の自個維持の爲に、自個修繕の爲に、必要なる物を選び、其の恒久なる運動に由りて廢物に歸したる物を投げ出すことを想像せざるべからず。

化學的生理學は或程度まで滋養の過程に於ける物質の變化を追究し記載したり。然りといへども其の變化の起る方法に關しては、諸大家各廣く其の推測を異にす。或る細胞が大凡此等有効なる物質中より、特に或る物質を撰取するの事實——（即ち水綿屬が水綿絲を求むる如き、又は上皮細胞が微小たる内容より脂肪分を撰擇する如き）に關して新活力論者バングは説いて曰く、「此等の現象に就て何等化學的説明の考究すべき物あるなし」と。然れどもエルランは機構的に此等の現象を考究するは、他の化學的變化を理會するが如く易し」と曰へり。（拔萃

論文五百二十八頁）蓋研究家が此等奇異なる巧妙なる而して複雑なる細胞の營養と變化の過程を、既知の化學的關係の下に致すに成効し得るや否やに關せず、吾人の今論しつゝある論點は、爲に銷磨せらるゝこと無くして殘存し、銳利に次の如く提出せらる、曰く細胞の此の内面の、自個淘汰的、自個維持的生命は、或る種類の單一を標識す。其の如何なる方法を以て起りしにも關らず、其の存立は個體に對向する自然界の運動に於ける一定の獲取なることを顯證す。（ハーバート、スベンサーの總論と、生命は單一に傾向せり」と云へるセリングの教義との關係に對するス氏の關説を對照せよ。「生理學原理」百七十八頁を參考せよ。此結論は更に生殖の現像に由りて強拔せらる。前章既に記したる如く、母細胞は二個の娘細胞に己を分割す。生命は然うして己を生殖す。生命は己に由りて己を蕃殖す、此の中に地上に於ける斬新なる、有効な

る單一てふ事實の存す。縦令結晶體の到來が顯著なりとするも、細胞内の自個蕃殖的生命の到來は一倍優りて顯著なりとす。原藻類と原蟲類とは共に微小なる物なり、一は植物的發端の最下等にして、他は動物の形狀の最劣等なり。點滴の水が彼等の生存する全世界なりとす。然れども是等最下等なる生命の小兒の始めて出現するに當つては、彼等の價值は、己を宿せる所の全世界より洪大にして、其の肝要は之を呼び起したらん日光よりも貴重なりとす。蓋は彼等は來るべき世界の福音使にして、地上の一切王國を服する所の生命と個體の王國を預言する物なるが故なり。

生命の王國を通じて單化の方法一旦獲取せらるるに及んでは、増加的差別に向つて其の道を奔る。吾人は第二步に於て動物的睿知の明白なる獲取を觀察す。

此の大なる獲取既に動物界の得る所となり、此の新なる單一の差別、其の得る所となれり。即ち自個自身の爲に自個以外の或物を使用する所の感覺的能力是なり。此の下等動物は此の有情的運動によりて植物界をして己に服従せしめたり。個體は此の機能に由りて來るもの如く見ゆ。生命は其の植物界に於て然すべく見ゆるが如く、唯盲目的に動物界に於て自個を維持し生殖するのみならず、又動物は自個の下に全秩序を置き、之をして己に服事せしむるに由りて此の進歩したる能力を獲たり。動物は其の辯識的觸手を以て自個の爲に植物を捕へて之を用ふ、彼は其の有情的辯識に由りて之を爲す。

一種の動物の多様な支族は單に同數の繼續として木枝の葉の如く、又は果樹の花の如く、但外形を異にするが如きに非ず、動物の種に於ける多數は有情的實在にして、各自に其自身の生命の感覺を有す。其の

發端に在つては、吾人が序論に於て説きたる如く、動物的感覺は或る植物の感性より辛うじて識別するを得。興奮性即ち刺戟を受け又之に反動するの能力は、一切生ける物質の最初の性質として考ふるを得。然れども動物階級に於ては此等の一般的感性は則ち特殊のとなる。此の能力は動物的生命が、動物的審知として吾人の認むる所の感性の高等組織に上ばるに隨ひて愈益進捗せられ、増殖せられ、發達せらる。此の如く發達し、標識せられて以て、個體ある動物の有機體の特別なる性質となる。是を植物的感性より區別されたる動物的感性なりとす。此の感性は外よりの刺戟に對して内よりする反動の局部的中心を有する所の神経系を有するに由りて生理的に決定せらる。有らざる種の中、一倍發達したる明白なる此等の神経的中心を有する物ほど、其種は一倍個體化したる物と稱せらる。其の各支族は單に維持すべき種

の特性と習慣とを有するのみならず更に又顯示すべき特別の運動と生命とを有す。猛禽又は野獸は自個生命の激洩と其の價値感覺とに動かされて、其の生存を維持するに、驅逐又は退飛の熱狂間的奮闘を以てす。高等動物の猛烈なる競争の行はるゝ所以は、單に其の種の保存の爲のみならず、又自個保存の爲なりとす。個體は此の高等動物の平面に於ては猶未だ十分に種の生命より發生せざるなり。蓋は動物的感性は生命が自個及び其の自由を自覺する感覺に接近せるよりは、寧ろ植物の感覺的運動に猶類似するやう見ゆればなり。遮莫自然は明白に高等動物に與ふるに倍一倍明白なる個體的價値を以てす。自發的運動の能力を有し、苦痛に對する其の新獲の資格を有せる高等組織の動物の生命は、其の動物に種的價値より區別されたる高等の個體を假與す。苦痛を感じる新獲の能力は高等個體の自然的價値の一部

分なり。

個體の過程に於ける第二步は人格の獲得によりて標識せらる。

此の獲得の偉大にして而して吾人の歴史的智識を有する限、艸卒なること、之に先つ進化の全過程の絶頂と謂はんよりは寧ろ全然新奇なる發端なるやう、多數の學者に見ゆるほどなりき。精神は、其の自由能力に於ける吾人の意識に據るときは、一切他の精力と異なること、吾人の觀察する所に由れば、兩者は較量すべからざるやう見ゆるほどなり。一を以て他に比するは、恰も分量を以て性質に比せんと試みるが如く見ゆ。吾人は物質と精神とを通量すべき何等共通名辭を有せざるなり。是故に人類の出現せし後、創造は物質と精神なる二種に由りて成立せりと言はれたり。而して一の過程と法則とは、之を他に移すこと能はず。

す。然れども第一章に於て吾人は自然の原始的一致に對する科學的議論の無限の動量に言及したり。是は一個繼續せる自然過程に於ける或る絶對的破綻の觀念を吾人の心中より一掃す。吾人は既成の宇宙の人物と事物の進化に於て、科學的に二元論を許すこと能はず。若し人格が實際自然界の隨所に成立發見せらるべしとせば、是は自然的方法を以て來れる者ならざるべからず。人格は自然の秩序の中に其の適當なる、指定されたる位置と時とを有せざるべからず。外國の輸入の如くならず、土産的、固有的にして今之と共に在る物又之より先に在りたる物と或る關係を有し、又此等より生すべき物なりとす。精神は吾人が己の内に之を知る如く、物質と比較しては超自然的なるが如く見ゆるといへども、是は自然的に物質界に對する既成の關係を維持せるものならざるべからず。超絶してはあるべし、天上的にてはある

べし、然れども其實超自然的ならず、自然に反對せざることなし。人格は寧、初よりして存する所の、進化全體を貫通して自個を啓示せんと終歴逼したる所の、精神的原素及び精力の選精進化として考へらるべし。諸の自覺の人格的中心は宇宙を貫流する所の精神的精力の選精進化の諸點なりとす。人格は精神的火雲より終に明亮に輝き出せる精神的星斗なりとす。

吾人は從來人格の起原に關して二個の想像説を有す、一は超自然的降下の想像、他は自然的向上の想像なりとす。此の第二の想像説に據りて、二元論は實際逃竄したるに非ず、唯更に後方に推し遣られたるに過ぎずと謂ふ者あらん。此事若し果して然らんには、進化の行程の遙かなる下方に於て、卒然精神物質間の二元論に出會はざるは更に利益なりと謂はざるべからず。蓋は若卒然預告なくして「心」が動物の肉體に

侵入すること、盜賊の夜來るが如くなりとせば、是は説明すべからざる現象にして、吾人の一切の自然の智識を混沌に歸せしむべし。「心」が突然上より物質體に突入りたりと云ふ想像説は、自然の行程を其の中央に於て二分す。此説は自然をして始め一方を見、次て突然左右を見、終に他方を見せしむるものなり。動物的睿知の全一の進歩的發達をして流産に歸せしむるものなり。而て人類は自然の失策を補充する後思案として顯はれたるなり。此の超自然的降下説に由れば、人類は彼以前なる動物時代に於ける一切の睿知の法則と預言とを成就する爲に來れるに非ざるなり。反つて其の方向に於ける全一の行程が失敗を證したる後、肉體に心を加ふべき第二の創造的企謀として見らるゝなり。吾人は人類の出現を以て、造物主が睿知ある一個永劫の目的に於て更に一步を進めたる成功と考ふる方を擇ぶ。

且夫吾人が他の關係に於て一倍詳細に見るべき機會を有すべきが如く、吾人は若人類を自然より別れたる者として考ふること無んば、實際的に哲學的、宗教的結果の危険を免かるゝことを得。人は獨り孤立して己の内に己を啓導し、又己の生命——彼自身の人格即ち其の己の爲に祝福すべき所の奇跡——を有する者に非ず。將た現世に於て一外國人の如く、其の羈寓的寂寞に居りて己を自然界に不遇なるものと感じ——彼自ら世界に反對し、世界を己の敵とする——必要なきなり。吾人は由つて以て人格を獲得したる悠久なる向上的自然過程を追究するときには、個體の發達よりして次の事項を學ぶを得。吾人人類の生命は根本的に之に先てる一切自然と、之を繞れる一切世界とに結合せられたること、自然的、社會的意識を同時に伴はざる所の自個意識は、個體の流産的、墮落的形狀なること、他の一切の被造物の上なる人類の

生命は、自然より孤立せず、之と共通的、親戚的關係を以て、又其の住居する所の宇宙に附屬し、其の故郷なる生ける神に在つて一なりと云ふ友情的感情を以て、成立せるものなることを學ぶ。

前世紀の發端に在つては、此の世界は隔絶したる者として、——其自身に於て完全なる一全圓體として、六日の間に一齊に開展せられ、全能者の手に由りて空間に投出されたる一大球の如く、過度に宗教的に哲學的に考へられたり。此の地球と關係せざるべからざりし最も大なる人は、謙りて唯一時此の地球上に住むべかりき。人類は自然と隔絶して、神の前に其の犖獨なる、畏怖すべき責任を遂ぐべき者として、恰も嚴冬の地平線上に顯はれたる淋しき人影の、己の周圍を外套に包み、地平線に反對して鋭切に明白に突出したる者の如く、瞰下されにき。十九世紀の詩歌、傳道的人道、又科學は吾人に殘すに自然と人類に對する他

の見解を以てせり。アルツワルスは、其の發端に在つて詩人の心を此の人造説より解放し、吾人の生命を自然の中に送り返しぬ。許多の有力にして又恩寵ある勢力が一齊に結合して、吾人は人道に於て同一なりてふ高貴なる感覺を以て吾人を醒覺す。吾人は唯一切萬有の善によりて、吾人の微小なる個人の杯が恒に溢るゝばかりの祝福に充たされ得ることを知る。孤立に由らず交通に由りて個人的生命の完成すべき如上の高等なる真理の部分として又根本として、近世科學は神の子輩の更に顯はるゝことを既に吾人の爲に待ち、猶吾人と共に待つところの、其の熱心なる待望を懐ける凡の被造物と、吾人自身と、其の起原に於て、努力に於て、運命に於て、同一なることを、吾人をして一倍豊富に證悟せしむ。前世紀の科學は吾人に遺すに人類が自然に屬すてふ斬新なる獎勵的感覚を以てし、隨つて又人類と、宇宙の「精神」と交際し得べし

と云ふ倍深、倍高なる宗教的感覚を以てせり。自然は吾人が今之を知る如く、發達なり——或る方向に於ては多分今も猶發達しつゝあるなり。吾人は野の百合、空の昴宿の如何に生長するかを思ふ。人類も亦創造の初實の一なり。其の人格は世代の結果なり。其の價值や測る可らず、其の長く生長しつゝありし故なり。一切萬物は從來實に此の人格の到來の爲に勞きしなり。吾人は太初分子が精氣的或物よりして成形し來ること、其分子が自個以上の肝要、即ち吾人が今日自個として感覺し得る所の生命の原素的發端を引き受けたることを想像す。吾人は顯微鏡の領域に於ける單細胞有機體の自動を見る、其の大古の生命すらも、遙に吾人自身の可存を預言する爲神秘不思議の物となる。吾人は高等動物界に於て睿知、快樂、苦痛の發達を追究し、其の發達を精力の聚散、形體の構成、目の開關、腦の純化として、大凡之を尊敬す。是は

時満ちて「思想ある呼吸する生物」を可存ならしめ、以て吾人を之よりして生産せしむる所の物なり。吾人が此の偉大なる精神的獲取の中に、人格的共分と部分とを受け、此の「精神」の一切の世代の喜樂を受くるに於ては、吾人は謙遜なる感恩的畏敬を以て、其の破綻なく確實に發達する生命の説明としての無上なる一言の眞理を學ぶ、曰く、「我父は今に至るまで作きたまふ、故に我も亦作くなり」。

然らば則ち此の詩的感想は、前世紀の發端よりして、又人類、自然の同根に於ける此の科學的信仰は、其の終末に於て、吾人の哲理と信仰とに何事を要求せる乎。拒絶に非ず、省略に非ず、恐懼に非ず、唯理會是のみ。

人類、自然の此の同根は二十世紀に殘存して、人格に關する吾人の哲理的觀念に収容せられ、之に同化せらるゝことを待てり。吾人の人格の定義は、若其の卑賤なる起原と其の高貴なる向上との此の眞理を包含

せずんば不完全なり。又吾人にして若此の人格を何等か之より以下なる或物と同視せんは洵に此の眞理を失つべし。而して又人格的生命と其の成就との觀念の中に、之に先ちたる一切自然の過程を收容するを誤れば、又此の眞理を失つべし。完成したる個體を以て、此の個體を完全に誘導したる所の形體譯註人類以下の動物及び過程と同視するは、恰も神と世界とを同視して不經にも汎神論に降下せんとするに均し。然れども萬物が如何にして神の内に成存するかを、吾人をして一倍切實に感知せしむべき何等かの科學的又は哲學的觀念を得ることとは汎神論に非ずして宗教なり。創造物全體が如何に有らふる所造物の家子なる所の「人」に總括せられて、以て事毎に彼の優越を顯はさんが爲の方便となれるかと云ふことを、一倍切實に感知せしむべき自然の同根の或る科學的觀念を得ることは、——損失するに非ず反つて此

の人の子に於ける吾人の個性の一倍豊富なる所有を發見し、其の一倍高尚なる默示を發見することなり。人格の自然的歴史に關する科學的見解は、吾人の人格の觀念をして、或る哲學的再閱を受けざるを得ざらしむ（モリス氏、新自然神學二百七頁）。然れども此の如き再閱は、決して損失に非ずして寧得益なり。吾人は人格が由つて以て此の優勝に致されたるの途を、一倍明亮に見んことを學ばんと欲すればとて、其の現時の自由と其の精神的差別とを一倍不明亮に見るべきに非ず。人の子の世に生れたる喜樂あるに當りて母胎よりして個體生命の別れ來れること、並に之に先たる自然の全過程の成就したることを理會すと云ふことは、人格の觀念を擴張し又豊富にするに外ならず。是の下等なる起原よりして、而して又停止するなく、變轉するなく、徑直なる生命の路を執持するに由りて、自由なる自覺的なる道德的生物の明白に

して恒久なる價值は獲られたり。最も深く精神的差別を意識する所の人は、又自個自身が一切美なる外界と、人道の全體と、活ける「實在」と、實際に恒久に一致せることを最も眞實に、最も満足に感ず。

此等の暗示を追究するは吾人を導ひて哲學的領域に至らしむ。然れども此の論點に於て吾人は博物學者の徑路よりして餘り遠く離るべからず。此問題を一倍哲學的方向に追求せんと欲する人々は、或は時には之を追ふに困難を發見すべけれども、ワード氏の最近の著述「自然論及び不可思議論」に於て、其の適當なる手引を發見すべし。彼は批評的冷酷を以て、進化の途上に第一に、物質を置き、第二に精神を置く所の思想家輩の陥る所の矛盾と荒唐とを明にせり。世界の惟一てふ事實を吾人の理會すべき哲學的鎖鑰は、吾人の自覺の中に自然に起り來るところの信仰、即ち精神が萬物に先つと云ふ信仰に由りて與へらる。

心は或は人間人格の中に特別なる默示として後に來りたるものなるやも知れず。然れども睿知的、精神的或物は進化のアルファにして又其のオメガなり。縦令吾が一切の科學、又は一切の哲學を起すに、單純なる精神先導の假定を以てするとも、精神の第一着なることを假定し以て進化を通じて其の增加的默示を發見すとも、無論吾人は困難を遁るべきに非ず。將一切の秘密を解くべきに非ず。然れども吾人思想の遭遇せざるべからざる所の困難は、吾人の智識の有限なるより起るべく見ゆるものにして、必ずしも事物の性質に横るにあらず。一切の科學を超絶して殘存せざるべからざる所の秘密は、吾人の爲に無限の光の秘密として満足に殘さるべし、震慄すべき大闇黒として恐るべきものに非らじ。縦令世界が十分には理會せられざるも精神的世界としては少くとも合理的なり。機械的進化論は理會すべからず、將合

理的にあらず。吾人にして若精神的方面よりして始めん乎、吾人知る所は一部分に過ぎずとはいへ、吾人の知る所は則ち之を知る。若し機械的方面を以て始ん乎、吾人は何等知る所なし、其の知ると思ふ所さへ無意義なり。深く形而上學的に入ること無く、單に博物學的觀察點よりすれば、此の問題は次の如く概括するを得、曰く、吾人は「精神」の假定的先導より發足して、自然を一貫せる睿知的方向の原則に信任して、少くとも唯一徑路を追ひ、同一向上の徑路を維持するを得。前へ前へと自然を追求するに決して導線を失ふこと無し。植物界動物界に於ける有情及び睿知に關して、既に知られたる所の一切の事實と動物の中なる睿知の活動を顯はすべく蒐聚せられたる一切の觀察と、一に合して以て進化の連續的精神的行程及び性質を顯證するの用を爲せり。終極の顯著なる永久なる人格の到來は、奇跡に在らずして到來なり。人

格は個成の自然過程の全體に冠するものにして、進化が恒に之に向つて指導せられたる所の超世的事實なりとす。

博物學者謂ふべき所は、若我人格を定義する能はずとも、之を許諾することを得。我若生命を定義する能はざるも、我之を所有すべし、我之を利用すべし。縱令吾が科學が之を知ること唯一部分に止まるとも、吾人の知り得る所の眞實は何等疑ふにべきあらずと、唯是のみ。

次に吾人の思想の行程に來る物は、自然界に於ける人格の到來の意義を一層完全に穿鑿する事なり。吾人は個成に於ける自然の悠長なる過程の絶頂なるべく、又光榮なるべく見えたる所の人間人格の此の最上事實の意義を、如何に解釋すべきか。吾人の既に主張したる如く、人類の自覺的生活は、人類の到來以前に、自然の全過程を通じて一齊に作

動したる所の一切精力の結果なるべく見ゆるとも、決して其の精神的優勝を失ふこと無し。吾人の人間人格の價値は世代の費用に由りて之を計算する時にも高等なる評價を受く、避くべからざる自然法を以て、人格の高尙なる天職と精神的淘汰とが世界の基底よりして確定せられしことを吾人が發見せしとき、人格は一倍の肝要を加ふ。此の結論に由りて吾人は進化中の一事件としての人格的生命の到來に就き、更に深き意義を發見することを準備せり。之に先ちたる他の小事件が、一倍顯著に指示せしが如く、此の人格的生命は進化に於ける其の精神的精力の一階級より高等階級に持續すべき能力を有することを示せり。自然は其の自個以上に向上する間に自個を破斷すること無し。時又時に自然が倍善なる或物に向上すべく、若くは自個以下に降下し去るべき時に危機は毎に到來す。而して其の危機は宇宙の内面の精

神的精力に對して未だ嘗て過多なることを證せざるなり。若自然が唯此だけの機械なりしならば此事然るべからず。蓋は單純なる機械は危機に對會して之を駕して上ること能はず。然れども自然は則ち之を爲す。機械は決して自己を超越すること能はず、然れども自然は決勝點を経過して進行す。自然の中なる精神は、其の然る如く、自個を蒐聚して目的の方に壓迫す。

一階級の終に於て、進化は往々前方に一大進歩を爲すべく見ゆるとは眞なり。然れども飛躍は決して無目的に闇黒中に行はるゝ物に非ず。將新階級は嘗て舊階級より之に到る能はざるほど遠隔したるに非ず。然れども茲に進歩あり、而して新は恒に舊よりも倍善なり。物理的階級より原形質的階級に至る太古の一步は、——最初に起りし此の一步は吾人其何時又何處に起りしかを知らず、——之を渡ると自然の精神

的精力に取りて過長なると無かりき、將最高等の動物の睿知より、最下等の人間の睿知に至る迄——其の距離如何に廣大に見ゆるとも、——之を掩ふと如上の「精神」に取りて過難なると無し。吾人は信ず、活ける神は何の處にも己の思想を破綻すると無し、彼は進化に於て自個を成就せり。人格は自然界に於ける神性の成就として意義せらる。

吾人は進化中の一大事件として到來せる此の人格の意義を種々なる細目に於て發見すべし。茲に人類の到來に於ける二個の注意すべき特徴の指點すべき物あり。一は次の事實によりて示さる。人間の到來せしとき一方向に於ける進化が阻遏せられ、其の方向は更に生命を開始したる他の方向の繼承する所となれり。肉體は停止して精神進歩し、生理的發達は留まり、心的發達の一新路開かれぬ。感官を銳利ならしめ、本能を修飾する所の久續の過程は人體に於て其の終局を告げ

たり。動物的感覺は自覺に對して副次補助の位置に落ちたり。自覺的に確定せられたる生命は、概して本能的活動に取つて代はれり。吾人の自個の内に動物的感覺の保守並に服従の證據を觀察し得。蓋は一方に於て感覺は其の絶頂に於ては吾人の神經組織に控制せらるればなり。中央機關としての人類の腦髓は之と關係せる神經的組織を併せて全備したる感覺機關——自然が動物的感覺の平面に於て生じ得たる最も精密に、最も巧妙に、而して又最も精神的に應答する組織——なりとす。全體として之を見れば人類の腦髓は完全なる感覺なりとす。特種の感官に於ては、或る下等動物は人類の感覺力に超越したらんは無論なり。鶯は空氣的周圍に於て倍利なる視力を有す、鹿は林間の警戒に於て倍鋭なる臭覺を有して吾人を遁るべし。花の中なる微蟲すらも吾人の眼の感知する能はざる所の或物を見るべきほどに、

其の複雑なる眼の小面と奇妙に關係したる神經節を有す。(ワレイス自然淘汰)九十二頁然れども吾人が全體としての感覺を考へ、又周圍に對する其の種々なる順應を考ふる時は、吾人は感覺は人體に於て明白に生理的完全の極度に達したりしことを結論するを得。或る方法に於て感覺は猶増さるべし、然れども其の形狀に於ては完備せり。吾人の現時の身體の上に單純なる肉體の他の發達の何等特徴あること無し。自然は今日人類の腦髓の複雑なる構造に於て發見せらるゝより倍高、倍精なる分子の按排を、有情的生命に對して何等約束を與ふること無し。容知の使用に供する元子的物質の組織が此の程度まで腦の捲旋の内に致されたる事實は、智識を超絶したる奇跡なりとす。若精神の使用の爲に形體が更に高尙に致さるべくんば、一倍精氣的なる物質が用ひられざるべからざることば明ならん。一倍精巧なる原

素を以て賦與せられたる細胞の元子的物質より構成せられ、一倍纖巧なる神経的模型に組織せられ、審知的生命に猶一倍不思議に服役すべき所の或る肉體が、將來此の粗糲なる土地から興り來るべき何等の暗示、何處にも之あること無し。吾人の觀察の推及する限、自然は精神の使用に對して人身に於ての其の分子的組織の終局に到達したり。此の結論は或る特殊なる感覺に於ては、既に或る動物に於てよりも人體に於て退降し、一倍粗糲となれりと云ふ事實に由りて愈明白に證明せらる。蓋は人類の感官に於ける此の如き沮遏及び輕微の退歩すらも、感覺の最高點が既に彼の神経組織に於て得られたること、及び既や此の方向に於ては一步も進めらるべからざること、を指示す。既や一步も、此の肉體の此以上の發達を要せず、唯身體の新儀形の到來を要するのみ。

若進化が人類の現状を超へて繼續すべくんば、生理的發達を阻遏する必要、及び心に對する或る身體の新なる階級の必要あることは、吾人が高等動物が其の本能に由りて演ずる役目と、人類に於ける本能の使用とを比較せんときに明白なるべし。個體の自個の生命を維持するの努力は、動物的本能に於て究極す。本能は動物世界に於て保護的武器として銳利に磨かれぬ。然れども人類に在つては本能が動物の所得として存する同時に、幼冲よりして殆ど副位的職分を演ず。本能は自個保存の爲め主要なる本據に非ず、人類は或る關係に於ては自然が動物的感情より得來りし本能の銳刃を銷磨せり。然れども此の損失は利得の爲なり。動物的本能の損失は人類の劣等なる野蠻的種族に於てよりも、寧ろ高等なる審知的典型に於て多しとなす。後者に於ける得益は高等種類の自個生存に由りて劣等種類を遮蔽するの結果なり

とす。理性の盛なるに従つて本能は衰ふ、他の或物の厚用せらるゝが故に、本能は不用に歸す。

此等の事實は人格的生命の出現に就ての倍深の預言的意義を暗示す。人格と其の可能的發達を通じて進化の新路開かれたり。肉體の阻遏は靈魂の生誕の告知なり、——靈魂は其の種類に従へて生長せざるべからず。

他の大なる解釋的意義を有せる事實にして、此の關係に於て其の從來受け來りしより數倍の注意を價するものあり。人類の出現したるが爲に個體が既や主として其の種の爲にせずして、其自身の爲に生存し始むる所の點に到着したりと云ふことは、非常に重要な進化の一記號なりとす。是は實に決勝點なりとす、——之を經過することは無量の收得なりとす。遂には種の價値は個體の價値に於て究極す。種な

る人は、人としては個體的人格として生存す。

吾人の略説したる所の個成の行程は、遂に價値の變更を結果す。初に久時の間、個體的生命は其が種的保存の事業に順應したりし故に價値を有したりき。有機體の萬群に取りては、如何なる費用を以てしても種を維持し保存し、一倍高等なる種の爲に道を備へざるべからず。今や人類よりも何等他の高等なる種の來るものあること無きに至れり。而して個人は自個生命を自個に確立するに至れり。今一倍精密に其の眞理を検する、吾人に取りて有益なるべし。

下等有機體中に在つては生存競争は明白に種の成効の爲なりとす。胚種は生存す、不死なる者は個體的生命に非ずして一般的生命なり。自然の第一利害は、單に種を構造し維持するに在るべく見え、種の保存せらるゝ爲には、萬の個體を犠牲にす。個體有機體の群簇は其の生起

する同時に死滅す、多數は唯其の生殖する間生存す。例せば蜉蝣は簡短なる結婚的飛翔の爲に日光の中に生存し、其の種類を維持する努力に由りて死亡す。子子孫孫交迭して起る。其の種は然く死亡する所の諸の形體あるが爲に生き繼ぐ。生命環は之を完成する所の有機體の轉換する間、斷絶することなくして存す。絲蘭の蛾の如き或る成熟者は其の子孫、即ち全然其の父母有機體と異りたる形體と習慣を以て生存し又彼等に就ては親蛾が何等經驗を有する能はざる所の子孫を將來に保存せんと、奇異なる供給を爲すを見るべし。彼は決して其子孫を見ず、之を見るときも之を識認すること無し。是故に其の父母は己が知らざる所の子孫の利益の爲に、勞めて紡ぎて、而して死す。是故に自然の第一の關心は個體的生命に在らで種に在るなり。——世世代代其の倦む無く追究したる目的然り。空中に翱翔し、牧野に發花し、水中

に蕃殖する生命を觀察する者が、一般に感ずる所の一は、即ち自然は個體を計算せず、種に對する思慮が其の全心を占めたりと云ふ事なり。吾が老神學者ジョナサン、エドワードが徳義の本義として考へたる所の一句は、取つて以て自然の太初の特性に適用すべし、曰く「一般に於て生存することの愛」と云ふ是なり。自然は初に特別に於て生存すること慮らざりしやう見ゆ。

自然が宇宙的主位を種に屬して、個體に就ては何等考慮する所無しと云ふ此の觀察よりして、吾人は此の思想を吾人の生存の價值に移すことを得。即ち如上の法則が吾人に對しても維持せらるゝこと、如上の勇健なる過程は猶依然繼續せられて、爲に個人は自個自身に於て何等特別なる價值を有せず、彼に先ちたる一切の形體の生命が生死する如く、單に個體が永久死する間に、其の種族が保存せられ人類の生存する

爲に生死せざるべからずと云ふ思想是なり。然れども吾人以下なる世界よりせる此の推理は、吾人の生命の價値に關して正當なるを得るや否や。個體は現に人格的生命の平面以下なる或物に對しては、何等計算する所無きが故に、吾人人類の平面に於ても種が主物にして、個體は自然の關心する所に非すと云ふことは、眞正なり乎。此の點に於て、吾人が往に説明したる所の原則が、吾人の推理を啓導すべく入り來る、

——吾人の指示する所は生命的價値の法則なり。

繼續せる生命の各段階は、各其自身の生命的價値を有す。進化の一階段に於ては、一の状態が生命の爲に倍大なる價値を有し、高等なる平面に於ては、他の特性が價値ある物となるべし。進化の道上の每點に於て起る疑問は是なり、此點に於ての最も價値ある物は何なりや、是故に進化が進歩するに當つて、往に要部を演せざりし、若くは生命に對して

主位の價値を有せざりし或物が、起つて無上價値の位置を占め、自然に其の全力を盡して守る所の一個の法則となるとは、有り得べき事なり。是故に若し進化が人格と云ふ高等なる平面に達して、個體が往に自然界に於て未だ知られざりし所の價値を受くべしとも怪しむに足らざるなり。若往に有効なりし所の法則、個體が單に種の爲に生存する所の法則が、人類の出現すると同時に或る他の高等なる評價に従副となることあるとも、連屬は破綻せりと謂ふべからず。若其れ然らば進化の此の階段に於て、個體に附せられたる新なる評價が、自然の一切過去の過程を通じて、察知せられずして生長したりし所の價値の絶頂なるべく見ゆることは、蓋然的なる事なり。是は始終自然の心に隠れたりし價値の思想の默示なりとす、果して然る乎、自然は種に對する明白なる關心の底に、發端よりして倍深の情慾を懷きたりしこと、又自然が縱

令之を語らざりしとはいへ、個體と其の高貴なる價值とが始終其の一切思想の秘密なりしと云ふことの事實、果して之なき乎如何。

之に答辨を與ふる爲に、吾人は再び生命の事實を見るべし。然も之を一倍熱心に穿鑿すべし。吾人は生命の向上するに隨ひて、種の保存と對照して個體に與へられたる價值の關係的增加を示す所の特徴の、愈加はるの事實を注意すべし、次の如き特徴は此等の事實なり。吾人は種を維持するに必要な個體の數の制限の愈加はるを見る。種の保存の爲に個體生命に一倍の遊戯の與へられたり。種の爲に個體は一倍使用せられぬ。例せば種の保存の爲に要せられたる所の魚又は昆蟲の卵の大數と、鳥又は他の高等哺乳動物の卵の少數とを比較せよ。

ワイスマンは金鷲が唯一卵又は二卵を蓄ふること、同時に、自然は僅に一羽二羽の子鷲の保護の爲に、細心なる供給を爲し、金鷲の保存の爲に

此の供給に信頼すること、即ち自然は稀少なる數と高等なる個體とに信頼すべく初めたることを注意せり。自然が種を維持するの方は斯の如く浪費的生産の方法より一變して、少數産兒の細心なる養育法となれり、有限は浪費に代りて自然の進歩的個成の新特徴となれり。種は既に多數の聚族に由らず、少數の淘汰に由りて繼續す。自然の供給の道は無謀の浪費に類するを廢めて、遠慮ある方法となれり。自然は既や大數中の少數が、破壊を免るべきの機會を執らず、細心に淘汰したる少數が、生存競争に於て己を維持するべき能力に信頼す。簡短に之を言へば、自然は一倍高價に個體を評價し、進化の中に漸く多く之を用ふ、此の變化は亦預言的特徴なりとす。

此の事實に加ふる更に進歩したる事實あり。是は高等動物に在つては、個體の生命が、單に其の同數を生殖する爲の價值として存すべく止

みたる後に、猶延長せらるゝ事なり。下等動物中なる生命の自然の制限は、直接に其の生殖的職務に關して決定せらるべく見ゆ。其の職務の盡さるゝや否や個體は死す。自然は復た之を使用する所無し、是故に死滅す。然れども生涯と其の生殖力の間關係は、高等動物に於て一變す。新原動力入り來る。母たること復た不幸ならざるなり、母たること更に高等なる價值を帯び來る。母たること人間家庭の幸福として繼續するに至る。

此の關係に於て、由て以て適當なる觀念を作るべきは、ジョン・フリスク氏が指摘し極言したる所の其の進化の顯著なる光景、即ち高等動物の幼兒の時期の延長と、人間家庭に於ける幼兒の特別なる肝要と其の美といへることに在りとす。自然は一切此等の徴候に由りて、其の個體に對する評價の増加を示せり。個體の爲又彼の幸福の爲に、自然は勞め

且續きぬ。彼が爲、又彼の人格的生命の爲に、自然は一切を犠牲にせり。長年の愛と喜樂の爲に生くる所の母と子の爲、男と女の爲に、自然は一切の時代を獻し、其の一切の勞力を盡しぬ。個體の完成、是れ自然の一切方途の目的なりとす。彼が爲に自然は世の始よりして愛を其の心の底の秘密として蓄へ來れり。

吾人は此の事件を生物學的に次の如く總括すべし、是は其の肝要なるが爲に茲に多少の覆説を要す。吾人は個體が先種の爲に造られたるやう見ゆること、個體有機體の順應が、自然に其の種的維持の價值に關係して淘汰せられたること、個體は種が保存せられるべき爲に死すること、個體は種の保存を便宜ならしむる爲に滅ぼさるゝことを許諾す。然れども之に反して個體の上に將に來らんとする價值を顯はす所の進化の或る光景、初に在つて顯著ならず、然も漸次生命の進歩するに隨

つて顯著を加ふる所の或る光景あり。個體は種と對照して、着々として其の肝要を得べく見ゆ。個體の然く其の價值を増加する途次に於て、遂に一の平均點に達し、茲に自然の生命に於ける二個の利害が平衡し、個體と種と平等に其の生命的價值を有したることを想像せよ。然らば如何、此の過程の茲に停止せざることは確實なり。自然は決して何等の平均點に於て休息すること無し。自然は決して死せる中心に繋留せらるゝ所の器械に非ざるなり。若此等二個の利害、即ち種の其と個體の其とが正に平均したりとせよ。然らば二個の過程は自由に放任せざるべし。此か彼か孰か自然淘汰の行程に於て決勝し行くべし。自然は種が一物として保存せらるべしと云ふ原始的必要の確取に返るか、然らざれば個體の至上價值に於ける高等なる確取に推進まざるべからず。後の場合に於ては、最高の生命的價值に對つて前進す

る運動の自然的論理は、結局種族生殖の事業が、個體的人格の不滅に從副するを要求すべし。此の事若果して然らば、吾人は更に種を生産する所の能力をして、人類を生産する能力に從副せしむべき或る傾向を、進化の中に發見すべく待望することを得べし。

他の結果として相續して種族を造る所の個體の數の制限せらるゝこと、至高者に由りて生命を得たる所の個體の永生と不滅とが、自然に含蓄せらるべし。種族が相續する子孫を以てせる所の蕃殖に由りて維持せらるゝこと止みたらん以後は、其の生産したる個體の生存の連續に由りて生存すべし。此れが即ち人類の生命に於ける實際の絶頂にして、また其の永久の價值なりと云ふことを、想像すべき理由を發見し得る比例に隨ひ、吾人が此等の考慮を抽出し得るは、吾人の智識を超越したる他界の生存の條件に對して或る進歩的順應を有する所の人

類の人格的・生命の連続を、自然に假定することなりとす。

吾人は次に次の一事を注意すべし、即ち少くとも此等の事實及び進化の半は啓示したる傾向を目撃したる上からは、單に自然が種に對する表面上無情なる看護の事實を根據として、個體的生命の將來の連續に反對する議論を既や抽き出す能はずと云ふ事なり。何となれば個體の生存的價値が時に及んで最上の價値となりたる故なり。個體の生命に對しては自然淘汰自身は終に制限の下に置かるゝに至れり。是故に個體が人類の自覺的人格に於て其の自然的絶頂に達したる所の、此の全體の過程の爲に誘起さるべき、最終の疑問は、此の如く提出せらるべし。曰く人類の生命の中に種の生命的價値と個體的生命の價値の間に、平均點の到達し經過するあるに非ざる乎。生命は今人格の連續に於て甚しき危地に在るに非ずや。最後に得られたる此の個體的

生命は、果して至高の靈的價値を有せり乎。更に一步を進むべく、前なる一切を完成すべく、而して進歩すべく、猶此の一事——個體的生命の不滅てふ目的に對する壓迫——を爲さねばならぬと、遂に是れ果して然る乎。残る所の一事——一切此以下なる事物の完成されたる曉——永生に對する完全なる順應を得ることが、活ける人格の當に務むべき所にあらずや。是故に一切の成就なるべき此の新なる階級に於て、種なる人類は地球に於て蕃殖すること止み、靈的個體なる人類が不滅に生くべきに非ずや。全體としての進化は、吾人は問ふ、此の方向を指摘せざる乎。吾人は基督教的默示に於て、復活の子類は娶らず嫁がず、恰も天に在る神の使者たちの如くなるべきことを確信す。換言すれば復活的生命に於ては、種なる人類は死して、個體たる人類生存す。生命が由りて以て富殖せられ美化せられたる兩性は、復た生命の爲に要

られざらん、——彼等は復た娶ることなく、結婚の子類なる男も女も、天使の如く生存すべし。人なる種の死するに由りて、一切の大成就として個體の不滅が獲取せらるべし。其の世界に價すと評はかられたる者、其の生命が此の如き生存的價値に到達したる者、——是れ天使と等くして神の子類たる者なり。(路加傳第二十章三十六節)

吾人が然かく暗示せられし希望に向ひ、博物學的方面よりして一層切に近邇するに先ち、此の點に於て吾人に對面する所の或る他の疑問を決し、自然界に於ける或る他の精神的原則を説明せざるべからず。

第九章 進化に於ける退化

人類の倍善なる生活に對する希望に面對する所の諸の疑問の一は、自然界に於ける退化と云ふ確實なる事實に由りて提起せらる。吾人の人格的生命の如く然かく高尚なる平面に到達したる所の此個成の過程は、其の一步毎に墮落的可能の道を開く。此の如く上達したる生命の絶巔に於てすら、墮落することは可能の事なり。吾人は此の個體の生命の爲に終に何等墮落の可能ならざる或る高所を得ることを希望し得る乎。進化の最後の目的は深坑への墮落なるべき乎、有らん限の競争の後、人格的存在と歡喜と云ふ至上の獲物を得たる後、生命に非ずして死が最後の法則なることを證すべき乎。若何等か此の如き事ありとせば、人類に關する此の最大懸念の結果に關する事實は何乎、吾人

は之を何等かの説明的光輝を以て讀み得べき乎。

退化は進化に於ける確實なる事實なりとす、自然の過程の中に往々或る車輪の退轉ありしは事實なり。徑直にして狹隘なる生命の道よりして、恒に兩側に外れる脱線ありき、生命の道は平同に向上線を成せるに非ず。或る損失、時としては表面上残酷なる損失が、生命の領域の上になる。正則的境遇の下にすら、同化作用(其の喚ばるゝ如く)即ち恒に有機體の營養に於て行はる所の變化の連續は、同時に建設的にして又破壊的なり、築造的にして又潰仆的なり。

不利なる境遇の下に種は其の得たる立場を喪ひて滅ぶることあり。退化は常有の事實なり、降等進化は恒に無窮の變化の車輪の上に可能なり。高等形體は下等形體に過渡すべし。生命的產物は破碎せられ得。結晶體は塵粉すべく、原素は熱に溶解さるべし。人類の降等——

其の高地よりして降落すること——は、自然的可能性の外ならず。生命の道を追ひ往けば、隨所に、又其の最高地に於てすらも、死は自然に來りて吾人に出會す、死は超自然の敵として不意に顯はるゝこと無し。然れども死の侵入は生命の失敗なるべき乎、退化は進化の一時の形狀なる乎、若くは其の最終の傾向なる乎、降落は臨時の偶故なるや。若くは生命の必至、不可治の損失なる乎、且退化と降落の觀らるゝ處には、又精密に検査すれば、自然に於ける何等かの退化の原則あるべきや。惡が由つて以て制限の中に拘へられ、善が由つて以て終に王たるべき生命の原則果して發見せらるべき乎。

吾人は自然界の必至、不可避の事物を、唯事實の實際的行程に據りてのみ判断し得、自然が實行したる事物に由りて、吾人は其の實行し得る事物を學ばざるべからず。事實として吾人は漸化自身——生命を富殖

する自然の力——が退化の可能力を含有せるを觀察す。生存に不利益なる漸化は實際起りたり、而も又排斥せられたり。中庸以下又以上に於ける生命の或る振搖が、自然の撰取せる進歩の方法すなはち如上の漸化の原則よりして結果す。

ガルトンの法則として知られたる科學的總括は此の點の爲に存す、是は「兒子的退却の法則」と呼ばれたる物なり。ガルトン氏は許多の事實の穿鑿によりて、進化に於ける平均の法則、即ち自然的漸化に由りて中庸に還歸すべき傾向を證明したり。例せば長身の兩親の兒女が、恒に同様に長身ならず、短身の兩親の兒女が恒に同様に短身ならざるが如し。平均に對向する此の如上の傾向は、智性的身長に關しても行はる。天才の子必ずしも同様に顯著ならず、又愚物夫妻の小兒も亦必ずしも同様に愚鈍ならざるは幸運なり。(ガルトン「自然的遺傳」遺傳的天才)。

人は道德界に於て又中庸に對する同様の傾向を觀察し得。吾人は單に社會的性質、市民的德義、乃至宗教的習慣に於てすらも平均的標準に吾人の行爲を維持するを以て満足せるに非ずや。發達の兩極端の間の中庸に對向する此の自然的傾向を見れば、進歩若苟も獲取し確守すべきものとせば、全體の聚塊を平均化するに由りてせらるべきこと明かなり。進歩的進化の諸條件の中に、生命が前後に、平均以上に又以下に、此の如く一進一退すること必要なりと見ゆ。自然の車輪の態度は或る振搖を許し、決して頑硬に過ること無し、是故に振搖は行はる。或る沈落は進歩の費用の部分として偶然的浪費なるやう見ゆ。有らふる進歩的進化の中に含まるゝ所の退化の可能性は減せらるゝこと無くして、寧倍大なる、預表的となる、攀れば即ち達するを得べき高等なる生命となる。降落は其の顯はるゝ所の形體の組織の愈精密を

増すに随ひて、愈顯著に愈嫌惡すべきものとなる。愈々複雑し愈々生命的評價を有する所の有機體に在つては、衰亡の由て來りし所の組織の價值に比例して、一倍廣汎なる不幸なる禍を含む所の降落の過程が繼續すべし。

單個の孤立せる所の細胞は、生物學者能く之を虐用するを得。若彼に毒を與ふれば其の原形質の中に忽ち或る變化を起し、其の活動全く破壊せらるべし。若其の細胞は單に自個の爲に生存せずして、或る組織の一部分たれば、其の正則的活動の損失の外に、他の又一倍廣汎なる結果が從ふ。他の細胞之が爲に苦み、已其の一部分を成せる所の全組織が影響せられ、其の服役する全體の爲に其の職分を盡すを失つべし。是に於て其の全體は死すべし。例せば癌腫的發達の個體的細胞は、不規則に蕃殖するものと知らる。彼等は直に種々なる分離の狀を成し、然

して急速なる降落の特徴を顯はすべし。其の結果として此の生長を包藏する所の全體の組織は急速に降落し、而して死乃ち之に續く。是故に降落は組織と共に其の程度と複雑とを加ふ。其の禍は個成の進歩と共に倍大す。

此の事や單に如上に記載したる病患の現象に於て眞理なるのみならず、又吾人が退化的進化の行程を觀察するとき、又之にも適用すべし。此の退化的進化とは、種が其の發達の絶頂に在つて、其の自個維持に對する不利なる條件に屈服するとき、起る所なり。既得の能力は不用の久續に由りて没取せられ、機關は不利益なる状態の下に衰萎し、其の子孫は廢物となる。然らざれば其の父母の形體、又は双關的形體に比すれば、生命の段階の上を退却す。博物史の一章之を説明して餘あり、——是は眼孔の失はるゝ方法に關する一章と題せらるべし。吾人は

之より二三の例を引かん。茲に「エリオニカス」と名けられたる人皆知る所の「うみさりがに」の譚話あり。其の住居は海中八百二十五碼の淵に在り、然れば此の「エリオニカス」の住む淵には、日光多く徹らざるなり。是故に彼は十分發達したる視官を擧て不用に歸したり。是は其の親戚にして、吾人の親友なる「うみさりがに」が、其の淺くして光ある淵に住む所に甚だ有用を感じたる所の物なり。「エリオニカス」に在つては、視莖が極端に減退して、其の親戚なる海岸動物の目の在る所の位置に、唯脈を存して「眼が念を入れて掘り出さるゝかの如く」なれるのみ。(萬國科學系統「衰亡的進化」百八十八頁)。甲殼類の一族にて「スコロフタルマス」と呼び、四千碼海中に住める者は、猶針狀を成せる視莖を有すれども、目は其の視莖に缺けたり。茲に又他の一種あり、是其の物自身其の住む所の深度よかさに隨つて、其の退降の一切次第を顯はすが爲に趣味ある者なり。

此の動物。——「シモノマス」——は海面に近づく時には可動的視莖の上に完全なる眼を造り、僅三百碼の淵に在つては、眼なき可動的視莖を示し、千五百碼に在つては視莖は固まりて針の尖となる(同上百九十頁)。吾人は此事實が、人類も亦其の目——道德的精神的視覺の能力——を其の習慣的に住居する所の深淵に於て失ふことを得べき方法を説明することを、茲に加へ記せざるべからざるなり。

且自然の歴史は餘りに有利なる生存の境遇の下に退化的進化の無類なる實例を記載す、或る寄生動物の生命歴史に於ける如し。茗荷兒エホシガヒは自由に游泳せる状態より生じぬ。初に目と足と各三對を有ちたる或る小動物は、其の宿主なる所の蟹の上に於て幸福なる生活に降下するとき、——其の養父の帽子木に其帽子を懸くるを以て満足したるとき、——幾も無く其の目と足を失ひ、單に滋養を吸收する所の袋となる。

此の「不義なる寄生動物界」と呼ばれたる所の寄生動物に關する有機體退化の實例を茲に止めて、吾人は特別に退化の可能性が既得の生命の額に對して正比例を爲す事實に向つて注意を喚起せんとす。目の如き特別なる感官は、永久なる、又骨折れる所得なることを顯證す。然れども其すら吾人の正に話したる如く、退化的生命の爲に失はるゝを見るべし。損耗、降落、死など云ふ可能性は、個成の過程が倍深倍高に進捗せらるゝに隨ひて倍大なること一般の稱説する所。是故に墮落の可能性は人格の最高等の平面に於て最大なるべし。人類の精神的絶頂よりする所の墮落は、最も深く最も闇黒なる物なり。其の顔面に獸類の記號を帶ぶる所の人の如く、然かく墮落したる生物あるべからず。自覺的智力の轉仆、是れ既に吾人の見たる如く、進化に偶然なる所の退化の限界なり。世界の罪は此の典型よりして自然的還元の極端に達せり、

——是れぞ即ち人の生得權なる所の神の像の損耗なりける。

此の關係に於て、死は人類の墮落に關して如何に考へらるべき乎と云ふ疑問興る。博物學家は死が世界に入り來りしは、生命の爲なりしことを見、進化の行程を通して、死は生命を賦役する役者たること明かに、死は墮落の特徴又結果に非ず、寧ろ生命を回春し富殖する所の手段なりと論じ、聖書神學家は、死は人類の歴史の上に其の原始的本性的職務以上に、道德的順應と効用とを取得せることを認識す。死は聖書神學上亦道德的生活を賦與する役者となれり、死は試練の手段として道德的秩序の上に既得の功用を有せり。死の恐怖は人類墮落の記號——人類の罪惡の刑罰的結果なり。(デヨンスの「基督的向上」百六十八頁——百八十五頁)。

自由なる人格的生命の平面の未だ到着せざる前に在つては、自然に還

元することは道徳的性質に關せざりき。吾人は之を偶然として考ふべし、若偶然と云ふ語に由りて、單に自然の諸種の可能性の中の一二が、實際となりたることを意味するとせば。若種子が失つて實を結ばずとも、其事自身は必ずしも種子の責任と云ふべからず。若機關が妨害せられ、若くは其の周圍の境遇の下に歪型せられたらんとも、此等は別に罪惡を行ひたるに非ざるなり。ヘルツィグ氏が天然に、一體に於て發達すべき蛙の卵の一部分を取り離してこれを壓迫し、硝子板の壓搾の下に不具なる又は減縮せる胚子を生せしめしに當りて、典型的發達の此の如き失敗に對して、吾人の問ふべき責任は、蛙の上に歸すべき責任あらざるは確實にして、其の智巧の手加減を以て、此の如き不公平なる境遇を生じ、此の如き不自然なる蛙を既定したる所の生物學者自身に在るなり。少くとも人類の良心に到達するまで個成の過程に於ても

亦然り。苟も問ふべき道徳的責任ありとせば、其の責任は進化自身の中ならで、進化の外に問はれざる可らず。其の責任は進化が其の形式を受け、其の組織を開展するに隨ひて、其自身の性質を開示する所の、先導的又既定的睿知に屬す。人類に至るまでは進化に對する責任は進化の過程の外に横はれり。人類の出現すると伴しく、責任は進化の中に入り來る。自然に對する原始的責任は神の責任なり、若茲に神在りしならば。然れども人類の道徳的生命に於て、進化は新なる性質を取る。進化は茲に自個責任の進化となる。其の作者の第一の責任は猶止みたるに非ず、然れども被造物の第二の責任が新に起る。自由精神的生命の點に於て、造物主は其の所造物と責任を分つ、所造物は造物主より自個義務を受領したり。人類は己の生存に由りて己の靈魂を造る、然らざれば之を壞ふる。是故に吾人人類の生命とは、吾人が由つて

以て靈魂を贏ち得る所の耐久其物として、基督の證明する所なり、
彼曰ふ「汝等忍んで其の靈魂を獲べし」——精神的階段に於て、靈魂は生命よりして獲らるべき物なり、——靈魂は吾人の自ら取り獲べき物なり、然らずんば靈魂は吾人の生命より失はるべき物なり。

吾人若如上の自然的方法を以て、人類の生命に於ける退化の事實に接近することを得ば、吾人は過度に心勞せる所の神學者が、人類墮落の教理に關して一切の進化學に留を刺さんと欲する所の難題に對して、極めて簡易なる答辯を吾人は發見すべし。彼等は問はん、進化論如何に人類の墮落を説明するを得る乎と。極めて、自然に極めて幽玄に吾人は答ふ。生命的向上の全階級の下に墮落の可能性あり。自然の精神的絶頂よりして震慄すべき降落あるべし。人類の降等は物理的なる如く亦道徳的なり、蓋は自個責任的生命は、人類の立つ所、其の墮落し得

る所の進化の絶頂に於て、取得せられたるが故なり。

然れども此の人類墮落の進化説は、墮落は進化の必至的過失ならざるべからずと云ふ結論を免るゝ物とす。一人墮落したるが爲に、人類全體が失はれたりと云ふ結果之に従はざるなり。人間の罪惡に於ける墮落に由りて、全體としての進化が恩惠なることを自證せずと云ふこと、之に伴はざるなり。蓋は許多の實例に於て見得べきが如く、個體的有機體は其の周圍に對する生命的順應を失ちて外に棄らるべきに拘らず、同時に生命の進化は繼續して進行すべし。變種は一時間生存すべし、然る後缺損するを發見すべし。種は種を追ひて生命の領域を亘りて後消滅すべし、然れども進化は之が爲に破壊せざるなり。進化は始終其の敗績せる間に其の勝利を進めつゝあるを見るべし。伸縮自在なる、然しながら破壊すべからざる現在の秩序の線路の裡に、恰も神

託の恩恵ある網細工の中にあるかの如く、一個善なる全體としての宇宙の恩恵ある法則の下に、吾人の自由なる人格は、其の範圍を有し、其の活動の餘地を發見し、其の限界に到達し、其の可能的墮落と罪惡に向つて飛躍す。

且夫是故に、人間の墮落を上方に墮落したりと考ふことは唯皮相的見解なりと見ゆるを免れざるなり。墮落は其自身に於て降下として考へらる。又降下以外の何物にも非ず、又決して向上的なる或物に非ず。何等の退化も其自身に就て見るときは、前進的歩武として考ふること能はざるなり。人類の墮落は其の真正なる典型より墮落したるなり。罪惡は下方に向ふ沈降なり。最闇黒なる深淵に向ふ沈降なり。然れども人類の墮落が下方への墮落なる同時に、墮落は決して進化以外への墮落に非ざるなり。墮落は生命の全體の過程の巨大なる恩恵

の中に包まれたるなり。退化は進化の中に供給せられ、降落は進化の版圖の外に降落するに非ざるなり。退化の中に失敗あり、退化の中に人類の罪惡あり。遮莫退化は全體の一部分として生命の一刹那として、他の目的を務め、其の結果として、生命の終局の勝利を確定するを見るべし、進歩は純自然論者の言ふらん如く、墮落の手段に由りて行はるゝに非ざるなり、又純超自然論者が宣ぶらん如く、墮落に拘らず行はるゝに非ざるなり。進歩は世の基よりして既定せられたりし如く、墮落を経過し、之を越して進行する所の進化に由りて行はるゝなり。其の進化の内に生命の遊戲と人間自由の運用とを許容されたる一個神聖なる運動は、自己と一切とを引率して、進化の破壊すべからざる目的を運搬す。進歩は人類の墮落を、創造的にして救贖的なる愛に由る自己の勝利に導く。此の中に不自然なる物不可思議なる物あること無し。人

類は全速力を以て西方に突進す、然も同時に其の軸に於て運轉する所の大世界は、天明に及んで彼を東方に致せり。人類は自個の運動に由りて昇る日を遁るゝ能はず。是故に此の進化の運動、全體としての神聖なる此の運動は、人類の個人的罪惡の歴史を來るべき主の日に致す。吾人は何等漠然たる道德的冷淡が、此の熟知せられたる人間墮落の事實を看過すること無からんために、務めて細かに如上の辯明を爲せり。蓋は如何に真正に而して又健全なる進化的觀念の下に於ても、罪惡は個體の爲に甚だ憎むべきものなり。然れども救贖の勢力を包含する程可なり、該博なる進化の觀念の底に、吾人人類の希望と信頼と之あるが爲め、此の世界の罪惡すらも獨逸人特有の熟語を藉れば克服されたる立場として見ることを得。

自然界に於ける墮落の更に他の一個の光景が、之に關して注意せられ

ねばならず。蓋は此の光景は、此の地上の人類の罪惡史てふ、廣袤なる精神的宇宙に對して、或る遼遠なる効用を奏すべき物なることを暗示すればなり。吾人は屢々博物學者の注意したる所の事實、即ち自然界に於ける退化が、新變種を引入するの用を爲し、之に由りて生命の或る他の發達を促進すると云ふ、甚だ趣味ある事實に言及す。且夫一有機體の或る部分の還元、若くは損失は、他體の高等なる發達を結果し、全體としての有機體の完成を結果するを見るべし。今や精神的宇宙は道德上の一全體として考へられるべき物なり。吾人は之を有機的單一として考へんとするなり。聖書に據れば、精神的宇宙は一個の道德的秩序なり。是故に自然的墮落より抽かれ得る所の比論は、此の世界の道德的歴史より道德的全宇宙の上に、善に對する或る遼遠なる反動あるべしと云ふことを暗示す。一使徒は其の致死的吟味の際に、斯く自

個を語りて曰へりき、我等は宇宙の者即ち天の使及び人々に観玩にされたればなり(哥前四〇九)と。吾人は人類の生命と精神的宇宙の全體との關係を、猶未だ之より深く廣く知ること能はず。人類の罪と苦痛との一倍遼遠なる結果の中に、吾人が知り得よりも一倍廣大なる恩恵が横はり居るべし。

吾人の推論の行程の直接に走り至る他の肝要なる疑問は、進化の恢復的精力に關する物なり。是亦吾人に取りては第一に事實の疑問なるべし、曰く、進化は全體として之を見れば、墮落を排除する傾向あるなき乎、衰亡及び死は進化の廣濶なる用途の中に、何等か生命に對する効用を倣せるなき乎。何等か自然界を通じて活動する所の回復の原則の暗示若くは特徴の發見せらるゝある無き乎。又其の如上の原則は人類救贖てふ或る一倍神聖なる方向に由りて完成せらるべきものなるな

き乎。猶更に終局の排除的漸化としての人類生命の道德的還落に由りて、精神的宇宙全體の爲に、或る一倍宏大なる善が獲取せらるべきことを、科學的に想 ること可能的ならざる乎、此の如き疑問の解決は次章に屬する所なりとす。

第十章 進化の恢復

吾人は先一切恢復的精力の活動の特徴を發見せんため、動物の下等面の上を探見すべし。此の特徴を發見し得ば、此は正に進化の特性と其の終局の傾向とを説明する物なり。

吾人は最初に胚種の中なる或る保守的能力を觀察す、——其の原型を固守すべき其の固有の傾向なり。原始的、固執的、保守心が、一切の胚種又は種子の其の特質を保たんとする忠實性の中に住めり。活ける自然の中なる最初の恢復的傾向は、胚種物質が肉體的切斷を遺傳するを根本的に嫌厭するに由りて明かなり。

吾人は是に於て近世生物學の最も論諍ある疑問の一に到着せることを感ず。兩親が其の生涯の間獲取したる所の善徳若くは惡徳が、直接

に其の子孫に移傳せらるべきや否やと云ふことは、最も争はれたる疑問なりとす。事物の明亮を期するが爲、又此の事物が本問題に於て極めて肝要なるが爲、吾人は其の既に言及したる所の此の問題を、精確に語る所あらんと欲す。

原生動物以上なる一切動物の肉體に於て、二種の細胞が生存す、——胚種細胞、即ち生命の由つて生ずる所の物、及び體軀細胞、即ち肉體の由つて造らるゝ所の物なり。如上の二種の細胞は卵の生命史の初期に於て自然に辨識するを得。今や卵の最近の分拆に由りて、既に取得せる肉體的特質に關する疑問は、單に此に止まる、曰く、動物が生涯其の體軀的細胞内に受けたる所の變更は、直接に胚種細胞に賦與せられ、其の胚種細胞よりして其の子孫に遺傳せらるべき乎、是は今日猶未決の問題なり。一派の生理學者は其の實際然ること、又然か爲され得ることを

主張し他派は既得の肉體的特質の此の如く直接に遺傳すると云ふ事實を強固に拒絶す。之を是認する一派は新ラマルク者として知られ、之を拒絶する所の一派は新ダーウィン者として知られぬ。其の證據は猶不満足なりとして論争せられつゝあるなり。

兩親の取得せる肉體の變更は、容易に又直接に胚種原形質に採られ、又子孫に移傳せらるゝ物に非ず。吾人は直接に正確に吾人自身の善徳と不徳とに由りて吾人の兒女を造り又之を失ふこと能はざるなり。其の然る能はざるこそ天幸なれ。生命の繼續的胚種は直接の干渉を憤ふる、是は其の固有的本眞を具有する子孫に由りて、其の父母の形體に於て切斷せられたる性質を恢復すべく傾向す。胚種物質は己の生命的決定に對して甚だ頑硬にして、縱令或る條件の下に毒害せられ着色せらるゝことあるにも拘らず、其の特種の個體特質を非常の

固執力を以て維持す。吾人が、自然が其の胚種の中に、保守的、自個恢復的傾向を顯はすことを主張するに當つて、既定されたる科學の範圍を出る者に非ざるとは明かなり。生命の原泉に於て、有らふる切斷的、降落的勢力は、原型を固守すべき胚種の傾向の爲に拒絶せらる。漸化は勿論許容せられ、慎重に授胎の中に供給せらる。兩性は蚤くより生命の回春及び様化の爲に自然の中に入り來る。然れども植物及び動物の卵、若くは受胎したる種子に在りて、生命を富殖するに必要な所の變更は、直に妨害せられ、形質遺傳の爲に限界せらるゝを免かれず。自然は然かく發端よりして進歩的なるが如く又保守的なり。自然は一時に兩者にして、而して又同一の微小なる原形質の胚種的遺産の中に於て然り。

吾人は更に進んで然かく胚種の中に固有せりと見らるゝ所の保守的

傾向は、一全體としての有機體を特表すること及び其の一切部分に貫通して、漸化が種の生存を威赫する度毎に、同傾向が恢復的沮害として活動することを注意す。此の精力が固有の發達力として有機體の中に住せるか、又は其が有らふる内面的又外面的勢力の結果にして、其の結果其物が有機體の上に働き、而して此の形狀を發表せる物なるかにつき、嚴密なる生物學的結果を今茲に之を擧げず。吾人の現下の主張は、事實として或る阻害及び健全なる徳義が、一切生物の生命歴史に於て過度なる又は有害なる漸化に反對して働くこと云ふ事なり。植物又は動物の身體は、科學の未だ容易に了解せざる或る方法に由つて、其の部分及び肢體を制限し、其の上に修繕的勢力を行ひ、一個の生物として過大の傷害となるべきやう一方向に向つて不格好なる發達、又は漸化を興すことを妨止す。生物學者は今や其の取り扱ふべき進化の諸原

動力の中に、諸部分の發達の上に此の全體の生活力あることを認識す。自然淘汰の勢力の下に、又一切部分の同等性に由りて、單に一方面に於ける、又單に一肢體に於ける過速極端なる發達の如きは恒に制限せらる。單に此の方面、彼の肢體に於て、過速過長に動く所の生命は召還せられ、一道の正路に送り遣らる。平均の終に保持せらるゝこと、其の全體としての有機體に最良なるかの如く見ゆ。均齊——其自身不可思議なる進化の原動力——が自然の最初の法則なりとす。然れども注意すべきもの猶之に止まらざるなり。

吾人は更に進んで有機的物質は或る制限の内に、自個再生の能力を有することを觀察せざるべからず、多の實例に於て、物體の損失せる部分が恢復せられ、又は一個殘存せる部分よりして全體が再造せらるゝことあり、植物及び動物の中なる再生の現象は、世人の皆知る所なれば、吾

人は唯之を簡短に之を總括すれば足る。貝が其の爪を失ひ、蜥蜴が其の尾を失ふことは、而して其の損失の利用せらるゝことは普通觀察の事實なり。老熟なる園丁は此の自個再生力を利用し、枝條を剪裁して市場に輸し、以て其の資本を加ふ。浴場用の海綿の養成者は同一の理由に由りて其の小片を抉り取つて、以て其の便宜的供給を繼續す。十八世紀の僧正トレムブレイは此の自然的再生を風雅に説明する所の經驗を水蛇の上に行ひたりき。彼水蛇の一片が如何に己を再造して、全き水蛇となり得るかと云ふことを示して、其の朋友を娛ませ、其の教會を愕かしたり。水蛇は若之を横に兩斷するとき、其の兩個の半分よりして、兩個の完全なる水蛇が成り得。

自然の此の再生的能力に就ての説明は、此の能力は初に有機的物質に屬するやう見ゆること、又其の能力が一般の能力と生長の過程とに同

盟せることを告ぐ。生ける物質は或る程度までは、殆ど其の活きて生長する所の條件と同一條件の下に、自個恢復的なる物とす。再生は生長と等く有機的物質の最初の徳義なりとす。有機組織の細胞は偶然負傷したる點に於て、唯其の特種の性質を有するのみならず。又全體の特性を有す。之に由りて其の負傷點は、損失せる部分が再生せられ、新規なる有機體が製造せらるべき萌芽となり得。ヘルツヰツグ現時の生物學問題(四十八頁)。

然れども此の再生力は吾人が注意して語りし如く、制限ある物とす。進化と同廣なるが如きは思ひも寄らず。此の能力は高等組織體よりして全く消滅せり。吾人の思ひ得る所は、其の僅少が解剖學の中に残り云ふことなり。吾人は屢下等生物に於て然かく富贖なりし所の此の自個修繕力を、吾人が倍多に有つこと無き故如何にと怪しむべ

し。下等生物は其の首を切らるゝも、直に又其の首を恢復す。然れども吾が人類に在つては、謂はふる基督教科學が其の失ひし首を再造することを考へ得しのみ。然れども此の痴駭なる物質獨立の假定説すら、若自個改造の能力の人類に残存せること蟲類に於ける如く、又其の身長を思想を取つて之に附加し得たりしならば、幾何か生理學的なりやも知れず。齒科學は若吾人が發達の間、其の骨を改造するの能力を失はざりしならば無用なる技術なるべし。高等動物の組織が保存せる所は、唯自然の原始の恢復的徳義の殘餘に過ぎず。然れども原始の傾向は顯著なり。此の傾向が自然の發端に於て恢復的並に創造的なる事は、自然の最初の企圖の特徴なりとす。他の趣味ある事實の一種類が吾人の觀察の下に來る。此の事實は亦自然界に於ける或る代用的能力を説明するの用を爲す所の物なり。

此は有機體の生命の爲に一部分をして或る他部分に代らしめ、若くは其の事業を成すべからしむる所の能力なり。此の能力は種々に話さるれども而も其の極めて確實なる所の顯象に由りて觀察せらる。此等の一例は「チトン」蠅が其の目を失ひたる時、附近の上皮細胞から其の目の透鏡を復生するに當りて成功する所の顯著なる行爲に由りて説明するを得。此の際此の物は特別なる自然的効用を有する所の細胞を取り、全く之と相違せる職掌に順應せる細胞を作る。此物は其經濟法に由りて、損失せる他の部分の爲に、視官として其の一部分、若くは化成せる一部分を代用す。他の例を與へば、若シ「ローズ」に切斷を施さば、幾もなくして其の纖維周圍の細胞より開放せられて、周圍に觸手の一列を有ちたる新しき口再生せらるゝを見るべし。稍相違せる法方を以て、此の自然の代用的能力を説明せば、一機關が損

傷せるに當りて、他機關が親から其職務を執る所の状態に於て其の實例を發見すべし。又機關の一部分は其自身の職掌の外に他部分の職務を執ることを得べし。例せば病理學者は吾人に告ぐるに若一個の腎が取除けらるゝに當つて、他の腎臓は廓張して二者の事業を成さんと試むることを以てす。此の如く肝臓の一部分が根絶せらるゝに當り、其の殘部が賠贖的生長を開始し、之に由りて肝臓の職務は猶盡くさるべし。「非常なる事情の下に、物體の殆ど全機關は其の正規的活動の全額よりも一倍多く爲すことを得。是は人の曰へるが如く、其の平日の事業に超絶したる所の貯藏的能力、即ち倍多の用を爲すべき所の能力を有す」。(ヘルツキッグ)胞細胞百六十五頁吾人も亦之と同じく、然らざれば對面すること能はざる所の肉體上の傷害と要求との場合に於て、其の平生の慣用を越へたる使用に對して、筋肉及び双關的組織の順應的

能力あることを考ふるを得。例せばロークスは海豚の尾鰭に於ける纖維の双關的組織が、一倍粗硬なる板面に順應せられ、随つて此の尾鰭が筋肉の活動に由りて許多の方向に動かされ、之に由りて種々の部分に於て或は硬く或は柔らかならしめ得べき奇異なる状態を證示したり。(ハーバートスペンサー「生物學の原理」第一卷第六十章)一機關の事業又は職務に代用する他機關の有限なる能力は、又生ける物質の中に内在する所の強固なる恢復的精力を示す。自然は傷害を受けたる肢體を再置すべき努力に於て窮するに當りては、他の機關を刺戟して其の餘分の事業を爲さしむ。

更に他の自然的代用の一種を記載せんことす、是は先爲的代用、又は同一目的を行ふ倍善の形狀の發達するまでの豫備たるべき臨時の功用と呼ばれたる物なり。此種の豫備的代用の注意すべき實例は、脊椎動物

物の胚種に於ける脊骨構成の歴史に於て發見せらる。教授トムソン之を次の如く記せり、曰く、「一切脊椎動物の胚種の中に少くとも或る時期、一個支柱的軸棒、即ち脊索と稱する原始的營養管の、背部の中央線に沿ふて發達したる物あり。是は蛞蝓魚及び八目鰻及び少數の舊式的典型の生命を一貫して自ら固執す。然れども以下の魚類に在つては、此の脊索は其の發達の際に脊骨の取りて代はる所となる。脊索は脊骨となること無し。是は相違せる、謂はふる中胎葉的起原を有する物にて、脊骨の爲に廢止せらる。脊索は一時の構造にして、其の周圍に椎骨の柱建設せらる。恰も長高なる煉瓦の煙突が、内部の木構の立場の周圍に建らるゝが如し」と。トムソン氏は猶之に附加して曰く、「勿論吾人は舊式の構造が其の將來の代用の發達の爲に準備し、之を刺戟する所の方法に就き、猶一倍知らんことを要す。然れども一機關が他機

關を啓導するてふ概念は茲に於て暗示せらる。『生命神學』百三十七頁此と相關して吾人は又一個稍之と類似せる能力を觀察すべし。是は舊者が其の功用の終を告げたるべく見ゆるに當りて、新法方を發見すべき頑強なる進化の傾向と特稱せらるべき物とす。此の特質は恐くは自然の恢復的能力よりは寧改革的勢力と呼ぶるべし。汝は之を主要なる動物典型の發達を瞥見して觀察するを得。發達の一途が閉塞せられ其の方向に於て復た何等の發達有らざるに當りて、進化は他の道を發見し、再び其の新なる道に發展す。生命の一個斬新なる道は、軟體動物に由りて試みらる。此の動物は自個の上に保護殻を着て安穩に泥中に定住す。此の物寄生動物に類はされたる時、其の柔弱なる、怠慢なる防禦は單に眞珠を隠すに止まる。然れども保護殻は終には生命が感官を得又自由を得ることを妨害す。牡蠣は其の殻の中に

保守的なり。

自然は他の典型を取ること遅くせず、生活機關は猶骨蓋の内に保護せらる。然れども肉體は環節に分たれ、筋肉は發達して感覺運動の機關となる。腦は一倍の注意用ひられたり。多忙睿知なる蜂の如き昆蟲は、自然が其の生活典型を改造するの第二の法方を顯はす。然れども幾も無く其方の發達停まりたりと見ゆ。新に擇はれたる典型は、疾く飛ぶ爲に妙なり。首も、亦蟲類の取得する所となれり、然れども外部の骨組は其の限界を有し、昆蟲は豫約的方向に出立したる後、其の大度と智力に於て停止し畢れり、——之より以上は此の方向に於て復た得べからざる故なり。自然は他の妨害に遭遇せざれば新なる構設的畫案を發見す。自然は此時に及んで脊椎動物の内部の骨組に着手し之を再三試みる。大蛇茲に生まれ、大禽及び奇怪なる怪物が時に及んで

吾が動物學に奇異なる羅旬語の題名を受くべく出現し來る。然れども筋肉の進化に於て、進歩の途は之以上開くべき可能の地なし。最も大なる闘技時代は此の石炭紀なりとす。此の時代に在つては陸にも水にも巨人ありき。彼等は駕御的作業を行ふべき智力を有すること極めて僅少なりき。自然は更に其の動作的典型を改善す。此際自然は神経組織に特別の注意を用ふ、神経組織が改良の主位を占め、遂に競争は勇者の爲に存在すると止み、戦闘は强者の爲に止みたり。人類の生命は其の筋力に於て存せず、其の頭腦に於て存す。吾人若進化の此の一般の特質の觀念を得んと欲せば、之を以て人間が造船事業に行ひし改良と比較し、野蠻人の原始の開鑿、又は支那人の舟艇又はノバスコシアの帆前船等より、精巧を極めたる快艇、又は最も疾く走る所の大洋の汽船に至るまで、兩々對照し見るに如くは無し。然れども其の典型

を改良する所の自然の作業は、倍大なる改善——吾人は曰ふべし——一倍考慮ある改善なりき。

是に於て吾人は直ちに問はんと欲す、此の自然過程の中に、保守的、再生的、或る意味に於ては、改善的精力又傾向を顯はす所の如上の事實の十分にして又最後の意味は如何と、

肉體的再生の機械學は、生物學に一個の問題を興したり。曰く此の能力は初め如何して取得せられ、次に如何して高等有機體に於て抑制せられし乎。此は二重の疑問なり。設其の失ひし部分を再生すべき所の有機體の此の能力が其の起原に於て、自然の發達的能力と連絡せる物なることを確證し得るとも、疑問は猶茲に残る、曰く、損耗を償ふべき此の能力が、高等動物の中に殆ど何等再生的能力として殘存せざるまで、機關の進歩と共に退縮するとは、如何して起る乎。是は恐くは構造に

於ける増加的分化の結果として機械的に説明せらるべし。構造は然かく差別せらるべし。而して各自差別せられたる機關は多種多様の原動力の浸入したる發達の長久なる行程を表明すべし。其の長久なる行程に由りて、最初の再生的能力、即ち一倍單純なる組織と一倍單純なる細胞との特質が、目又は肺の如き缺損したる機關の恢復するの事業に、十分成功するに止みしを見るべし。是故に此處までは生物學は自然再生の事實の説明に向ひて進むとを得、解釋的哲學は之に次で此の事實を取り、進化の性質の特徵として其の價值を考ふべき物とす。吾人は損耗を償ふべき自然過程の此の傾向を合理的に理會して、其の最初の善なる發意の開示となすことを得。自然の再生は進化に於ける原始的善性の特徵なりとす。若進化消耗の故に公然惡の可能性を存するが故に、道德的に非難すべくば、亦惡を償ふべき最初の傾向の故

に稱譽すべき物とす。若自然が惡を許容せば亦惡の現實となるに當つて、之に向つて反動す。自然は少くとも發端よりして此の恢復力を證明し得るほどの道德的性質を有せり。

又再生力の退縮の法則は、高等生命の費用の一部分たるべく見ゆ。此の損毛は利得の爲の損毛なりとす。是も亦善なる特徵なり。自然淘汰は生ける物質よりして可能的究極が行はるべき必至の理を伴ふ。一切取得し得る所は生存競争よりして之を獲ざるべからず。生ける物質よりして可能的究極を行はしむる爲に、若くは科學的に、目的に言及せずして語れば、行はしむる行程に於て、其の自個恢復力の減退が避くべからざるに至れり。其の能力は、汝若し之を欲せば、機械的必要あることを證するを得ん。此の能力の缺損は進化の費用の必要なる部分となる。其の多くを失ふは愈多く得んが爲なり。是は正に組織の

経路に沿ひて進歩する進化の爲に拂へる價值なりとす。眼又は腦の如く精巧に差別せられたる機關は、其の職分を盡さん爲に其の全計の生ける精力——其の細胞の精力の總額——が其の特種なる活動の上に聚中せらる。其の全體の有効的生活力が其の種種なる職分を盡すに従事し、其の自ら苦痛を受るに當りて、由つて以て自個を改造する何等餘剰の存する無し。其の全力を課する所の一事業に奪はれたる人が、自然の嗜好を失ひ他の小事業に餘力を存せざるが如く、彼の精巧に差別せられたる機關も亦其の如く、身體の爲に召されたる其の課業に己が一切の生活力を捧げたり。下等動物の自個恢復の能力、高等職分の犠牲となれり。自然は善結果を生ずる爲には犠牲を行ふことを遲疑すべくも見えざるなり。自然は有らゆる生命價值の得らるべき時に當つては、佇立して費用を算するを爲さざるなり。

如上が人類以下なる自然の恢復的組織なる上は、吾人は次に何等か類似せる恢復の原則が、個人的生命の高等なる平面に於て見られざるや否と云ふことを問はざるべからず。自然の唯一と云ふことに基きて、吾人は人間生活及び社會に於て、或る恢復的精力の作動の證據を發見すべく待望せざるべからざるなり。吾人は、人類が其の震るべき墮落に沈み、其文明の不幸と恥辱とに生くべき、自由の瞑眩的絶頂に到達するに當りて、進化は其の再生的傾向が顯はす所の最初の恩恵を全く失ふことを欲せざるなり。吾人は自然に此の進化の原性の新現象を觀望せざるべからず。而して恐くは人類の道德的、社會的生命の社會に於て、其の倍大なる範圍と能力とを待望せざるべからず。

或る關係に於ては既に觀察したる如く、再生力は人類の生命に於て其の結果に近づけり。茲には生理的に殘されたる物多からざるなり、吾人に殘存せる所の自然の治癒力幾分か之ありとす。而して或る形状の疾患に反對して免除せらるゝ、或る能力を生理的に有すべきことは有り得ることなり。近世の進化論者は進んで人類は自然的に酒精中毒より免るゝを得るゝを暗示を爲せり。彼思へらく、吾人若嚴格なる人爲的合理的淘汰に由りて酩酊者を排除せば、時に及んで酒精的飲料の結果から免かれたる人種を生すべし。唯此の節制的改善の道に由れば、世界は「初め嘗て酩酊せざれば決して全く莊敬ならざるべし」と云ふことを附加すべきのみ。(シトエー、リード)現今人類の進化三百七十頁恐らくは爾來吾人の生命の爲に、一倍の恢復力が、許多の疾病苦痛及び消耗を除くが爲に衛生的實行、醫術的智識によりて喚起せられ指揮

せらるべし。吾人を啓導すべき此の自然的恢復の最初の主義を以て吾人は人類生命に見えたる害惡問題に接近し、過去よりして此の上に投射したる預言的光明を見る。自然は生命の門の額に「大凡此の内に入らん者は希望を棄つべし」と録さるなり。一條の道が空白なる壁に盡きたる時に當りて、幾もなく他の門發見せられ、開放せられ、生命は再び喜樂と希望に移れり。自然も基督教も厭世家に非ず、勿論十二使徒の中に一人の厭世家はありき。闇黒に往き自ら首せし所の彼は其なり。彼は其の說話が福音の宣へらるゝ所には他へらるべきが如く、消費されたる膏脂に於ける、其の消費されたる芳香が、之を賣りて金錢に復されたるよりも、貧者の缺乏を救ふに一倍有功なりしことを知らざりき。吾人は吾人以下に於ける自然の消費が如何に生命の爲に慈悲且有用なるべきかを發見せり。再生的生活力の一大原則の道德

的繼續の中には犠牲の費用を以てすらも、人類に對する救贖備へられ
たるべきなり。恢復すべき人格的能力の一倍高き平面に於て、肢體や
眼は失はる。然れども心を更新し、靈魂を救贖すべき能力が、其の預定
の顯現の時至るを待ちつゝあるを見るべし。自然の再生的精力の初
期の徳義は、最も高き範圍に於て、或る救贖的恩寵を以て十分完全に運
用せらるべし。是亦事實と歴史の疑問なり。宇宙を組織したる精神
的能力は、救贖的能力、又約束として、自己を人間生命と人間歴史の中に
啓示したりや如何。吾人の道徳的生命に於て、其の作動の證據を發見
すべしとせば、其の作動の中に何等の不自然あること無し。若人事の
觀察即ちモーセよりキリストに至る、又は彼の恩寵より今日に至る人
類の歴史の觀察に由りて、吾人は茲に精神の再生的精力が、人類の生命
と緊要なる一致を爲して活動しつゝありき、今猶あること、及び人類は

此の如き精神的再生に適合せることを發見す。此の如き信仰に於て、
何等超自然的なる事物あることなく、生命の出て來れる同一原因能力
より、生命の再生に對する自然的能力に至るまでに、何等此等と反對す
る事物あること無し。生命の各階級に於て其の種類に従ふ所の再生
の能力は、根本的、生活的能力の一なりとす。基督教の救贖は、隔絶した
る事物として、人類に對して獨立したる造作的なる神の恩寵として考
ふべき事物に非ず。救贖は寧宇宙の秩序に入來して、自然其物を組織
したる所の第一原則の一を至高、至遠なる道徳的又精神的完全に致す
べし。蓋は他の法則の中に自然は恢復の原則を造りたるが故なり。
基督教の言説が吾人に確證する如く、茲に救贖の永久なる攝理存す。
此著述の目的上、此の自然の恢復の原則の作動を人格的生命の平面に
於て著はされたる物として、唯瞥見するを以て満足せざるべからず。

其の詳論は吾人の目下の議論を規定する所の自然神學に屬せず。寧ろ歴史哲學及び特に恩寵に於ける基督教理に屬す。

然りとはいへども吾人は茲に此の緊要なる恢復的能力が道德的平面に於て、高等に自由に活動する二個の光景を記載すべし。是は下等動物界よりして或る説明的光線を受け得べき所のものとす。

吾人は其の進化の歩武を進むる時に、精神的精力を解放するの法則と稱すべき所の、自然界の活動的原則を指示す。智的使用に對する倍善の順應の取得せらるゝことの眞なるのみならず、又進歩したる形體に在つては自然の中に固有せる智力が、其の精力の倍大なる使用の爲に釋放せられたること亦眞なりとす。

下等の生命に於ける他の能力に服従せる所の精神的精力は、之を制限したる所の境遇より解放せられ、任意に自由遊戯に起り、高等の生命に

於て、倍大の使用に服す。是は例せば高等動物界に於ける智力の使用に關しても眞なりとす。下等動物の限ある神経的應答に於ては、其の範圍洵に狭少なりとす。心は單純なる動物の中には束縛の内に拘へらる、智力は高等動物の中に於て一倍の自由を得、一倍の廓大なる按排を受け、一倍有用なる服務を遂ぐる爲に解放せらる。例せば射形動物イカ譯註海燕類マコノメは其の組織の中心に置かれたる頭、即ち神経中樞を有す。此の動物の此の下等なる典型は前方に近き眼を以て稍歪ゆがみなき運動を取つて泳游し又匍匐し得るが如き形體に、其自身を編むべき企圖に於て、唯一部分の成效を得たるのみ。此等に許されたるが如き此の如き智力の微光は其の使用に於て甚だ限られたり。蓋は此物は其の眼を其の口の端又は其光線即ち腕の末に有ちたる組織の、其の中心、又は一方に於て、神経節の位置を有するが故なり。然れども或る軟體動物、例せ

ば稍改良されたる經營の上に建てられたる鳥賊の如きは、其の首を前方に着くるやう行ひ、而して其の倍良なる發動機關と神經組織と其の頭に於いて突出したる眼を、發達せしめたるに隨ひ、動物睿知は例せば海燕セイントラの如きよりも、彼等に於て一倍自由なる活動を發見す。鳥賊は其の廻轉するに當りて、或る目的に其の頭を使用するを得。有機體が直前に見且動き得るに至りしは、智力使用の爲に大なる所得なりとす。別言すれば頭と目と運動の一線に致されしは、物質的制限よりせる智力の解放なりとす。脊椎動物は水を通じて飛び、又其の羽翼を以て空中を翔ること思想の如く迅速なり。凡進歩したる差別的機關は、動物睿知を其の制限より解放して、之をして一倍對等に、又明白パイクスラに有極なる活動に適せしむ。説明を増し加ふるの煩を避けん爲に、吾人は茲に生命の發達するに隨いて、愈多く智的精力の自然の束縛より解除せらる

と云ふことを一般法則として語るべし。智的精力は下等有機體に在つては此の束縛の下に服して一倍制限ある物質的條件の下に存せる物なりモルガン習慣と本能三百三十四頁。人類の意志は其の自由に活動する點に於て、此の精神的勢力の解放てふ自然法を説明する精妙なる莊嚴なる證據なり。意志の爲し能はざる物は何かあるや。意志に對する唯一の究竟制限は、他の意志是のみ。物質界は精神の活動の爲に手段を提供す、然も其の能力に何等究竟の保障を提供するなし。人は唯絶對に人によりて妨げらるゝのみ、意志は物質に由らず唯意志に由りて、——人の意志は唯神の意志に由りて、限らるゝのみ。今や如上の此の法則は、亦此の恢復の原則に適用せらる。其の精神的能力は解放せられ、其の作用の範圍は廓大せられ、其の勝利は生命の此の最高なる時代に於て、最も顯著なる物となれり。正に上に説きたる

如く、損耗したる足は時として自然に由りて恢復せられ、切斷せられし形體は再造せらる。一機關の職務は或る程度までは他の機關の爲に代用せられ、又は預先の服務が、倍善なる機關の發達を待つ爲に一部分に由りて行はるべし。然れども植物、動物の生命の境遇に在つては、自然は其の恢復力に由りて此以上には做す所ある能はざるなり。生理學的秩序に於ては、此の再生的精力は夙に其の必要なる限界に達す。然れども生命の最高平面に於ては此の恢復力は倍大の職務を盡す爲に解放せらる。人類の進化に於て再生力は主宰的原動力となる。再生力は人間界に在つて濶大なる光明なる範圍を有し、道德界に於て活躍的精神となり、人類の墮落と救贖の歴史に於ては、自然の初代の理學的再生に對して嘗て反對せざりし所の自由なる恩寵は、生命の最高時代の顯著なる榮冠となる。是故に下等の自然界に於て發端し而も束

縛せられたりし愛も、解放せられて、人間の生活に於ける一切中の最大物となれり。救贖的愛が如何に自然の再生的法則に隨ひて行動するかを一倍深く證明するは基督教神學に屬す。神は其の種類に隨ふ一切生存の階級に於て、到る處の一切の範圍に恒に神らしく自然的に行動したまふ。

救贖に關する基督教神學は、一切の階級と範圍との間に行はれ、恢復の原則の慎重なる比較に由りて鮮明にせられ、豊富にせらるべし。此の原則の行動其の方法、其の定限、其の機會の増加等、是は須らく人類前の歴史に於て、又人類の社會に於て比較せらるべき物なり。下等界より高等界に至る眞正なる類推——全世界に於ける精神の唯一に根據せるが故に、實際にして欺かざる所の類推——は斯の如くにして基督教の教訓と説教とに於て有効と做さるべし。例せば自然界の下等級よ

り高等級に至る救拯の方法の比較研究を、次の如き項目——第一生命
的修覆、又再生の諸勢力の直接行動、第二代用の特別法、——に組織せば
有効なるべし。蓋は吾人の既に觀察したる如く代用は、——自然の下
等なる平面に於てすら、原始的犠牲を含蓄する所の代用は、——自然の
再生的生命の大原則中の一なればなり。此の如き比較的研究が、新に
吾人の神學に教ふべきが如く、代理は世界の基はじみに授けたる原則なり。
代理は自然の心に反對したる物に非ず、自然の心には永久の賠償あり。
吾人は猶多く基督に於ける神の愛の一倍深く自然なることに就き學
ばざるべからず。然れども吾人は此の方向に於て、唯一刹那基督教神
學の他の回春の道を指摘し得ることを瞥見せんとす。此の道や新自
然神學が開いて以て信仰を待つ所の物なり。

恢復的原則の他の驚異すべき一光景は、吾人が其の自然界に於て、又人
間の歴史に於て、均しく發達するを見るが故に、今茲に註釋を用ひず、
て之を受領せざるべからず。蓋は此の原則は全體としての進化の、道
徳性の、一倍進歩せる、一倍深刻なる特徴を提供するが故なり。此の特
徴は此の原則の中、減縮的犠牲の法則、又增加的服仕の法則と稱せらる
べき一状態なりとす。

進化の進行し、生命の一倍高尚なる精神的勢力の解放せらるゝに隨ひ、
犠牲の必要減退して、同時に服仕の領域廓大せらるゝは顯著なる事實
なりとす。吾人は既に細胞の原始的殖民に於て、又聯合せる細胞の分
業に於て、又後世十分發達せる機關の間の生活的共働に於て、見得べき
所の相互服仕の原初的形狀を觀察せり。吾人は更に進んで同生、即ち
一體生活の實例として書籍中に知られたる所の種々なる場合を注意
す。此の相賴的生活の方法の初代の實例、——其の一を記すれば、——

共同を以て其の生活を維持する所の普通なる放散蟲類の趣味ある場合なりとす。是物は初め全く生物學者を眩惑せしめし物なりき。放散蟲類に寄寓したりと發見せらるゝ所の或る黄色の小細胞は、其の宿主の炭素又は窒素の消費に由りて生活し、自己の順番に於ては其の宿主の炭素的二酸化物を分解して、其生命的呼吸の爲に自由に之に酸素を返興し、以て其宿主の欸待に酬ひ、又彼自身の身體に由つて其の宿主に給するに其の原形質に對する二個重要な原素を以てす。「同生」の事實の中に生命の根本に於ける法則として見るべき所の此の相互服仕は、生命の全路を一貫して、愈益顯著を加ふる流行的原則となる。然れども之に反して明白に生命の巨額なる消費を含む所の犠牲は、自然の明白なる第一原則に非ざる乎、生命は生命を餌食にし生命は生命の犠牲となる。服仕は悠久なる間に、甚だ僅少なるべく見へ、犠牲は自然

界の隨所に一切物に亘りて見ゆ。自然は「齒も爪も眞紅なり」。然れども再三再四檢閲せよ、生ける自然を通じて種々なる時期に横截面を造れ、吾人は何を見るべき乎、犠牲の功用の減退と服仕の功用の増加とを見ずして何ぞ乎。是は高等の植物界、動物界にも眞實なり。破壊的競争の中に、保助的共働が愈多く算へらる。吾人は一切の生物が他の一切の生物に逆ひて相戦ふを發見するに非ず、一群屬並に諸種の動物團體が、相互の保護扶植の爲に相戦ふを發見するのみ。自然の觀念の開展するに隨ひ、生命を保存する爲に生命を消費すること愈減せるを發見す。競争は疾駆者の爲に、戦闘は强者の爲に猶存すといへども、漸く殘酷の度を減し、種の生殖漸漸徐徐に犠牲を減せり。兩親は訓練者、保護として生存し、母たるとは犠牲的費用を減じて服仕的意義を益せり。生産の劬勞は人の子の此の世に生れたる喜悅の爲に遣られたり。人

類の母たることは一の生命が他の生命の爲に全く棄らるゝことを要せず。母の生命の天幸に又有望に小兒の生命の爲に延長せらるゝこと云ふ幸福なる絶頂の到達したることを證明せり。人類の家庭に於ては、犠牲は既滅の原素となり、相互の役事が首要なる喜樂となれり。又犠牲は若猶存すべしとせば、服仕に變質して貴重せらる。高等なる精神の精力の解放せられ流行するに随ひ、世界の歴史の上に、自然の最初の殘酷なる犠牲の必要愈減じ、服仕は其の喜樂と共に愈益流行す。人間歴史の横截面は、若之を種々なる階級又は時代に於て截り、之を相互に照對せば、倍高なる社會的進化の犠牲の恩寵的性質を證す。戦争、其物すらも、其の一國民の財政に比して愈高價なるに至り、其の器械の愈致命的となるに至らば、其の交戦に於ては、愈不幸の度を減すべし。戦争は文明の進むに随ひて生命を費すこと愈少し、横禍は古代のアッシリ

ヤ人、メデヤ人、ペルシヤ人の戦闘に於ては巨大にして、近世の戦闘に於ては寡少なり。横禍は中古の接戦に於ては多大にして、後世の戦役に於ては鮮少なり。横禍は吾人の此の文明時代に於てすらも、前代には比例的に多額にして、近代に於ては比例的に少額なりとす。且現代に於ては此の大世界に唯臨時に英雄的犠牲を要求する同時に、廣く平日の服仕を行ふの領域を開けり。自然の第一法則は犠牲なりき。生命の最後の法則は服仕の法則なり。歴史上の無上犠牲なる人の「子」の犠牲は、一回限り提供せられし贖罪なりき。一使徒(譯註パウロ)は唯基督の苦痛の缺けたる所を充すことをのみ必要と感じぬ。基督の精神の行はるゝに随ひて犠牲の必要は減退す、殉教者の召徴は既に止み、或る單獨なる壯觀なる犠牲的行爲の爲に、生命を抛つゝの機會稀少となり、反りて忠信なる相互服仕の生命が今や一般の基督教社會に其の幸福な

る時節を得たり。約言すれば、犠牲は既に過ぎ去れり、愛は永劫墜つること無し。

吾人は猶問はざるべからず、曰く最高生命を得んが爲に、既や何等の苦痛又は死の残る無き乎。犠牲は全く過ぎ去りて、唯聖なる役事のみ残る乎。死其物は終に既や生命の爲め、生命の完成たる進化の爲め、無用として廢せられし乎。人類の運命の此の至要の疑問に對して、進化の研究より引き得る十全なる解答を與ふるやう、十分準備する前に、吾人は今一回事實に轉じて、自然の他の一大建設的原則に關して問ふ所無かるべからず。吾人は然して大凡此等の穿鑿の線路を以て、吾人親ら今其(宇宙)の光と影の中を歩き、之を驚き、之を信じ、之を待つ所の宇宙其物に關する吾人の理性的精神的解釋に結合せんと欲す。

第十一章 完成の原則

日耳曼の顯著なる生物學者ナーゲリ其の植物生命の研究を概括したる書籍の序論に於て、其の自然の研究に於て發見したる所の完成の原則に就て論述せりき。植物及び花卉の發達に貫流する所の或物は、此の生物學者に其の遍滿的、又主宰的現前を印象したり。彼は大成の原則てふ緊要なる熟語を以て之を稱呼せり(器械的進化論)。嚴格なる科學者の習に従ひ、彼は此の如き理想的名詞を用ひて以て或る形而上的企圖を宣説するに於て甚だ謹慎なりき。彼は此の名詞を用ひて、活ける自然過程全體の本性又運動の傾向なるべく見ゆる所の其の進歩的傾向を表彰せんと意味するを説明せり。吾人は今茲にナーゲリの

生物學の見解を採用し、又は之を論議せずして此の完全なる博物學者が數次、其研究に由りて受け取れる所の印象の至當の表徴である此の名稱を取らんと欲す。ナーゲリは此の肝要なる名稱を用ふべく導かれたる惟一の生物學者に非ず。大成に對する傾向、進歩的傾向、進歩的發達と云へるが如き名詞及び現實せらるべき或目的に達する運動を暗示する所の他の熟語、殆ど無意識に謹嚴なる科學的論文に潛入す。有らゆる形而上の觀念を拒絶すべき用意の周到なる所にすらも然りとす。自然界に於ける或る構造的、大成的原則の印象は、諸の事實の上一倍遠大なる關係を見る所の博物學者が、輕々に抹殺するを欲せざる所の暗示にして、彼等自身の思想に對する自然の應答なりとす。此の印象は自然を觀察する所の心が、自然を通じて默示せる所の心から受けたる所の、諸の印象の一なりとす。汝曰はんか、否、是唯吾人の心が

自然の鏡面に於て其の影を見るに過ぎざるのみと。然れども汝如何して之を知る乎、汝は自然が一の鏡にして默示に非ざること如何して知る乎。進化は到底現實にして、吾人を導ひて事物の實際を信せしむ。自然の硝子の背後に唯此だけの銀箔あること、及び自然は唯吾人の人的顔面を欺き寫す鏡なることを言ふに當つて、之を許證すべき何等の智識あることなし。吾人が自然に於て見得る所の光は、自然を通じて射出す所の光なりと言ふ方、寧科學的らしく而して又更に眞實なりとす。自然は吾人の意識の鏡に非ず、吾人の透して見る所の硝子なり、永劫の現實は内に照せり。宇宙の背景は金屬的薄片に非ずして精神的現實に屬す。

蓋此の生物學者ナーゲリは、自然界に於ける或る大成の原則を發見したる第一人に非ざりき。悠久なる前代に於て、彼の大博物學者にして

並に哲學者たるアリストートル既に自然界に於ける完成の原則を語り、自然自身が其の銳利なる觀察的精神に印したる印象を記するに亦此の熟語を以てせりき。近世の生物學が生命哲學の燒點として、自然は如何して形體を取りたる乎と云ふ疑問を提出するに當りては、或る意味に於てアリストートルに返りたるなり。自動力なき物體に非ざる所の成形的物體は、進化に由りて激昂せられ、形體と秩序と雅致とを受けたり。然かく成形的物質に形體を與へ、然かく之を完成したる所の構成的勢力又は過程は抑も何なりし乎。

此の議論を一層深く追究する爲に、完成の原則てふナーゲリの熟語に代ふるに完成の原則てふ名辭を以てするを可とす。是れ幾分は後者が發端に於て一切道德的含旨を避け、又其の觀察の下に來る所の事實と傾向とを十分精確に顯すやう見ゆるが故なり。

此の點に於て吾人は自然過程に於ける方向の事實と性質に關して、吾人の前章の推論に立ち返らざるべからず。然れども此等は一倍深く研究するときは、吾人の前に新しき光景を帯びて顯はれ來らん。又其の全體の事物は、個成の過程に就いて觀察したる事物と連絡して見るときは、今や餘りに破壊したる一切の人類生活に對して或る完成を與ふる所の好望を開示する所あらんとす。

既に吾人の注意を占領したる所の繼續せる事實と其の説明とを反覆すること要せず、然れども今之を服膺せざるべからず。蓋は是等は一倍深き廣汎なる議論の爲に廣汎なる基礎を建設すればなり。吾人は特別に一切の生命完成の上に於ける此等事業の意義を顯はすことを求めざるべからず。

自然界に於ける完成に對する不撓なる傾向の證據は、廣く生命の進歩